

地域活動論叢2018



Seinan
Jo
Gakuin



西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

★ ★ ★
大学公式キャラクター
要（かなめ）ちゃん
★ ★ ★



地域貢献活動キャッチコピー 「とどけ！ぬくもり 要（かなめ）から」
西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部 地域連携室

〒803-0835 北九州市小倉北区井堀1-3-5

chiiki@seinan-jo.ac.jp



ブログも見て



目 次

巻頭言 地域連携室室長	1
「花園に、山姥？2」 地域連携室アドバイザー	7
西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動の概要	10
《子ども・子育て支援と学校教育》	
1. 生き生きチャレンジキッズ	11
2. 一緒にあそぼう	13
3. いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き!!》“みんな♪フレアイ隊”	16
4. だいすきにつぽん	19
《食と健康》	
5. SAT システムを使った食事診断法	22
6. 『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開	25
7. 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動	28
8. 乳がん検診・自己検診法の啓発活動	31
《観光と地域活性化》	
9. 北九州市クルーズおもてなしイベント	34
《学生スタッフの取り組み》	
10. 広報活動グループ	37
11. グッズ作製グループ（めろんぱん）	40
12. クリスマス礼拝・クリスマスツリーマップ活動	43
公開講演会報告（2018年10月21日開催）	
「あの頃 ボクは 北九州男児 わたせせいぞうさん北九州を語る」	48
関西大学佐治スタジオ視察報告（2018年7月15日実施）	61
2018年度地域連携室の取り組み	68
新聞記事に見る 地域連携室2018年度の歩み ～地域連携室の足跡～	70

巻頭言 小さくても、美しく個性的な花咲く文化的な土壌の生成にむけて

地域連携室室長 谷川弘治

1. 地域に根差し、地域とともに歩む大学、短期大学づくりの^{かなめ}要として

少子高齢化の進展，社会経済的環境の変化等を背景に大学への期待は多様化し，所轄官庁から教育の質向上が求められるようになりました。地方の大学では学生確保に苦勞する状況もあります。そのような中，各大学では地域の人々に対して何をアピールしていくかが問われてきました。西南女学院大学（大学短期大学部を含む）は『感恩奉仕』の建学の精神に基づいて「地域に根差し地域とともに歩む大学，短期大学づくり」をめざしております。地域連携室は，このことを具体化する学長直属の部局横断的組織として2016年8月に創設され，様々な取り組みを展開してきました。

本学構成員と地域の皆様とのつながりづくりにおける地域連携室の役割は次の3点です。

- ① 地域の皆様に，私たち学生・教職員は何をしている（しようとしている）か，コンタクトを取るにはどこに連絡したら良いかを知っていただくこと（**地域貢献活動の広報等**）
- ② 本学の学生・教職員に，本学が地域の皆様にどのように見えているか，地域の皆様に何を求められているかを伝え，つながる機会を提供すること（**地域懇談会**，「**NP0と学生の交流会**」，ボランティア活動の紹介等）
- ③ 学生・教職員と地域の皆様の協働が広がり，深まっていく環境を提供すること（北九州市との包括連携協定や九州歯科大学との地域貢献活動の協定の締結等）

地域の皆様とのつながりづくりにおいて伊東幸雄参事及び今村浩司副室長の果たしてきた役割は大きなものでした。伊東参事（当時事務部長）は北九州市との粘り強い折衝により包括連携協定締結を導きました。今村副室長は地域連携室外部構成員の選出・委嘱，NP0と学生の交流会等，つながりづくりの先頭に立ってきました。

2017年度からはアドバイザーとしてコピーライターの石丸美奈子氏の参画を得ることができました。石丸氏は，本学教職員に対して「地域からみた西南女学院」について様々な機会に伝え，地域で活躍する様々な人々との繋がりを演出してくださいました。関西大学の江川直樹教授と関谷大志朗研究員，漫画家・イラストレーターのわたせせいぞうさんとの親交は，この一例です。狭い人間関係に留まりがちな大学人にとり，視野を広げ，社会性を身に付ける貴重な場となっています。ひとまとまりのシステムは外部との情報やエネルギーの交換によって維持され，発展していきます。石丸アドバイザーにはそのことを改めて教えていただきました。

『**地域活動論叢**』による本学の地域貢献活動のアーカイブと公表も，地域の皆様との間をつなぐ大切なツールとなっています。

2. 土壌を耕す - コンセンサスに依拠する^{オレンジ}達成型組織から^{グリーン}多元型組織へ

地域連携室は意思決定機関としての運営協議会と，執行機関としての室員会合によって運営されています。2018年度の事務は伊東参事，樋口室員，神山職員によって滞りなく進められてきました。伊東参事，神山職員，谷川室長の退職を受け次年度は庶務課が所轄事務局となるなど，体

制が更新されます。ここで地域連携室の2年半の歩みを振り返り、受け継がれるべき精神について考えてみたいと思います。

<あゆみ1> 土壌改良のための組織化

地域連携室の学内の役割は、本学の多様な地域貢献活動の展開を関係部署が承知しており、温かく見守り、育てていく環境をつくることです。それが地域の皆様の利益につながり、学生の安全・安心確保と成長につながると考えて参りました。それまでは地域貢献活動を行うグループの代表者が個々に起案（企画案）を作成して学内での合意を得ておりました。しかし参加予定学生が履修する科目の実施時間に学外に出向くには、15回の授業回数を確保できるよう条件を整える¹⁾>という学士課程教育面からの要請に応えきれない状況も一部にみられました。地域連携室運営協議会において教務部長を含む役職者によって協議した結果、<欠席分について補講を行うか、授業担当教員から欠席者に補習課題を提示してもらう>というコンセンサスを得て対応できるようになりました。こうした運営上の課題についてはその時々に関係者が集まることで対応することが、とても重要です。大学は教育目的を実現する^{オレンジ}達成型組織に変わりつつある中で²⁾、コンセンサスに依拠する取り組みを展開していくことが欠かせません。

<あゆみ2> ^{オレンジ}達成型組織から^{グリーン}多元型組織への地域連携室活動の転換

地域連携室の大きな行事として地域貢献活動交流会があります。地域貢献活動に参加した学生と教職員の経験交流の場としてスタートさせましたが、学生の参加が限られる、意見交換の時間がほとんどない等、当初から多くの課題が指摘されてきました。これまで2回の開催を経て「やらされ感」を訴える声等をもとに、いくつかの改善計画を実行してきました。

① キャッチコピーとイメージキャラクター

2017年度に向けて準備をする過程でキャッチコピーを作る案を室員会合に提示したところ、イメージキャラクターを加えて募集することとなりました。多くの学生、教職員からの応募があり、キャッチコピー「とどけ！ぬくもり 要（かなめ）から」とキャラクター要（かなめ）ちゃんが生まれました。要（かなめ）ちゃんは2018年度には大学の公式キャラクターに昇格し、地域に進出しつつあります。キャッチコピーとイメージキャラクターの募集・選考は室員がとても生き活きとしていたことが印象に残っています。多かれ少なかれ室員も抱えていた「やらされ感」からの脱却は、要（かなめ）ちゃんの誕生によって始まったということができるとでしょう。ここでは広報担当 浅野嘉延室員（入試部長）の役割が大きかったことを申し添えます。

② 室員を中心としたワーキンググループの発足

2017年度、室員を中心として子ども・子育て、女性活躍という2つのワーキンググループ（WG）が活動を始めました。子ども・子育てWGでは命婦室員と天本室員の提案で記録映画「さとにきたらええやん」上映とアフタートークの会を開催し、地域で児童福祉に携わる方々の参加を得ることができました。

女性活躍WGは「英語の西南」によるイメージアップを考え、クリスマス礼拝での上級生による英語と中国語のスピーチ、学外の関係者の招待等を打ち出していきました。18年度のクリスマス礼拝では、世界で活躍する先輩たち（卒業生）のパネル展示、クリスマスツリーマップの開発

等を学生スタッフの力を得て進めてきました。大谷室員、樋口室員、神山職員、石丸アドバイザーの役割はとても大きなものでした。宗教委員会等関係部署との調整も独自に進めていく等、自発性の高い運営がなされていることも注目点です。

③学生スタッフの活躍 (fig.1)

地域連携室の運営に学生が参画することを目標として18年度から、時々目的に応じた学生スタッフの募集を行いました。その結果、実習等でまとまった時間が取りにくい参加が難しいと思われた看護学科の学生が多く応募してくる等、予想を上回る反響がありました。10月の大学祭では①地域連携室グッズづくり活動グループ「めろんぱん」による要ちゃんTシャツの作成、野外ステージとポケットティッシュペーパー配布による地域貢献活動紹介、②広報グループによる地域貢献活動の紹介を兼ねた射的コーナーの運営、③わたせせいぞう講演会案内という3つのグループが活動しました。その後、12月のクリスマス礼拝でも学生スタッフが活躍しました。

これらの取り組みから学んだことは次のとおりです。

- ・ 目的（地域連携室がお願いしたいこと）が明確で、短期間に集中して取り組める呼びかけに応じてくれる学生たちがいる。
- ・ 目的と最低限のルールは室員から伝えながら、学生たちの創意によって動くことを大切にする事で、学生の課題解決力と実行力が発揮される。
- ・ 学生スタッフは必ずしもひとまとまりである必要はない。

①や②の活動で地域連携室が提示した目的は「地域貢献活動を紹介する」「要（かなめ）ちゃんを広げる」といった大まかなものであって、その具体的なイメージは学生と担当室員の協働を通して明らかになるものであった、ということをお忘れではありません。学生たちの創意を引き出す土壌として大切にしたいと思います。学生スタッフの活動を進める上で樋口室員、神山職員、浅野室員の働きが大きかったことを付記します。

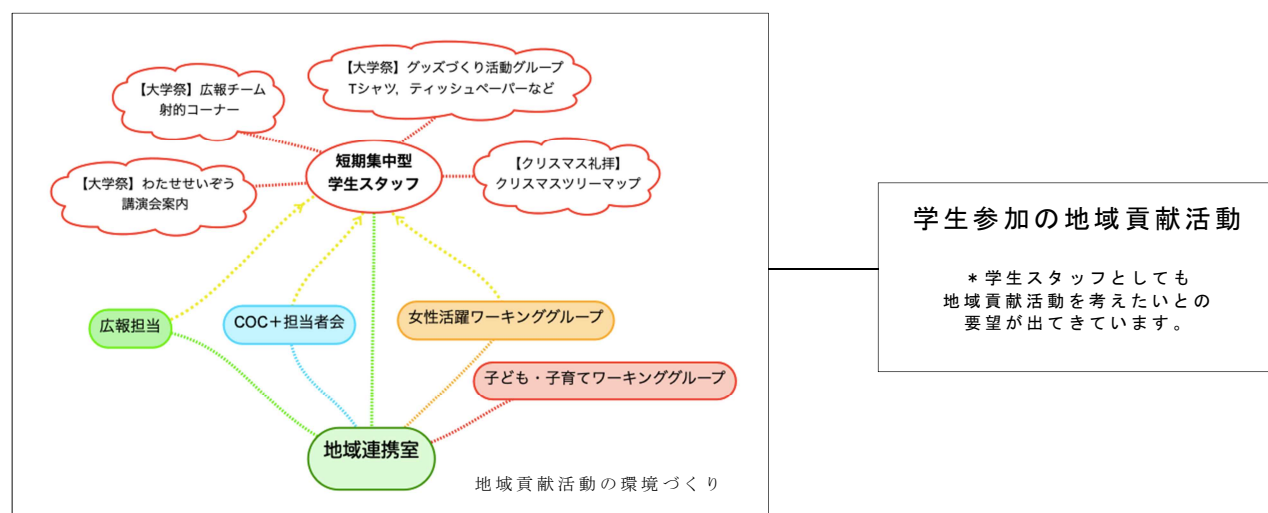


fig.1 18年度の地域連携室学生スタッフの取り組みと地域連携室並びに地域貢献活動の関係図

2017年度からはじまり18年度に本格化させてきたコンセンサスに依拠する^{オレンジ}達成型組織をベースにしつつも、その限界を超えるための3つの取り組みでは、参加した室員も学生スタッフも笑

顔で取り組み、達成感を得ることができたようです。「人間関係を使い果たす」のではなく「新しい人間関係をつくり出す」事業に転換させる契機を把握できるようになってきました。

ここで多元型組織^{グリーン}の3つの特徴をもとにこれらの取り組みを見直してみましょう³⁾。

①権限の委譲（達成型組織^{オレンジ}の階層構造を残すが意思決定の大半を最前線の社員に任せている）

学生スタッフとWGの活動は大まかな目的と守るべきルールが示されているが、具体化にあたっては現場の創意工夫を大切にしている。その意味で権限が委譲されてきた。

②価値観を重視する文化と心を揺さぶるような存在目的の存在

権限の委譲は一人ひとりが主人公であるという価値観を共有してきたことを意味する。また、学生スタッフは地域貢献活動や要（かなめ）ちゃんの紹介を通して、WGは西南女学院の強みを再確認することを通して、参加者のアイデンティティの再確認につながっている。地域の皆様とのかかわりの中でアイデンティティを確認していくには、さらなる取り組みが必要だ。

③多数のステークホルダーの視点を活かす（企業で言えば投資家だけでなく、経営者、従業員、顧客、サプライヤー、地域社会、社会全体、環境に対する責任をもつ）

3つの活動は、さまざまな局面で学生と教職員との協働を生み出してきた。学生が参加しやすい形態も見えてきたなど、ステークホルダーの視点に気づくようになってきた。さらに多様な視点が活かされるには学生、教職員、学外構成員、地域住民等で進める短期集中プロジェクトなどが構想されていくとよいのかもしれない。

以上から未熟ながらも多元型組織^{グリーン}としての質をもつ取り組みが進み始めたといえます。

4. 2018年度に行われた学生参加の地域貢献活動

table1 2018年度の地域貢献活動

＜子ども・子育て＞
・ いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き！！》“みんな♪フレアイ隊”（未就学児とその保護者）
・ 一緒にあそぼう（障がいのある子ども、きょうだいとその家族）
・ だいすきにっぽん（北九州市内の小学生とその家族）
・ 生き生きチャレンジキッズ（井堀小学校校区の児童とその保護者）
＜食と健康＞
・ 『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開（一般市民）
・ SATシステムを使った食事診断会（ESDセンターで呼びかけに応じられた一般市民及び学生）
・ 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動（浅生スポーツセンター利用者）
・ 乳がん検診・自己検診法の啓発活動（近隣の地域住民）
＜観光と地域活性化＞
・ 北九州クルーズおもてなしイベント（外国クルーズ船の外国人観光客）

ここまでに紹介しました学生スタッフの取り組みは地域連携室として「地域貢献活動の環境づくり」を担うものとして呼びかけられ、実施されてきました。地域連携室は縁の下の力持ちであり、メインは地域貢献活動そのものです（fig.1）。地域連携室に申請のあった、教職員と学生による地域貢献活動として9つの取り組みが実施されました（table1）。これらはゼミ活動などの正課又は／及びボランティアとして実施されています。継続的に実施され、学年を超えて受け継が

れているものが増えてきました。多くは多元的組織の特徴を有していると考えられます。

このほか、地域連携室では地域諸団体主催の様々な活動への学生のボランティア参加をコーディネートしてきました。

これら地域貢献活動、ボランティア活動、そして学生スタッフの取り組みの詳細は、この『地域活動論叢』の記事をご覧ください。

なお、学生スタッフからも地域貢献活動そのものを実施したいと要望が上がっており、今後の展開が楽しみです。

5. 一人ひとりの物語づくりにつながる地域貢献活動をめざして

前項にみてきたように私たちの取り組みは、本学の土壌を耕すことから始まり、ようやく成長し始めたところです。それぞれの種が秘めている生命力に依拠してこれからもすすんでいきたいものです。そのことを押さえて、今後の課題をいくつか述べていきたいと思います。

(1) 一人ひとりの物語づくり

ある学生は当初地域貢献活動をすることで就職に役立つかなと思って始めたが、取り組みを続けることで計画性や時間遵守等を学ぶことができたと話してくれました。自分で始めたことだからこそ、この学生は経験を通して自分の物語を書き換えていったのでしょう。社会人基礎力や専門性は、自らの物語に組み込まれて、血となり、肉となって活かせるものです。

教職員と学生による地域貢献活動の多くは1年のスパンの中で計画され、学年を越えて受け継がれていきます。一方、地域連携室のプロジェクトの多くは短期集中型です。実習、国家試験対策等がはじまると、地域貢献活動にエネルギーと時間を割くことは難しいことが分かっているからこそ、「いま、ここでできる何か」を強く求めているという場合があるように思われます。多様な目的やスパンをもった活動があることで、学生の一人ひとりの物語づくりにつながる確率が高くなるのではないのでしょうか。

ここでは学生について検討してきましたが、学生に限らず、教職員、地域の皆様が発信元となる取り組みを育て、思いを込めて取り組める、あるいはそれぞれの**物語づくり**につながる契機がどこにあるかを掴んでいきましょう。

(2) 晴れの日の取り組みだけでなく、**曇**の日のあり方に目を向けよう

地域連携室はイベントの仕掛け人ではありません。大学祭の学生たちのがんばりは、晴れの日のイベントだから実現出来たという受け止めもあるかと思われませんが、私たちの呼びかけが学生たち一人ひとりの日常の中で溜まっていた「やってみたい」にひっかかり、日常を少しだけ変えたというのが実際のところだと考えます。そのような日常の少しの変化は、その後の歩みを支えてくれるため、大切にしていきたいものです。

学生、教職員、地域の皆様の思いが集まり、それぞれの**曇**の日のあり方が変化していくことに地域貢献活動や地域連携室の強みがあることに目を向けていきましょう。

(3) 評価されるものとするもの、支援されるものとするものという関係性を超える

これらの活動では、基本的に学生と教職員は同じ立場です。地域連携室は資金を出しますが、

その支出ルールも、一緒に守るものです。要ちゃんTシャツ作りでは、学生の負担を減らすために教職員にカンパをお願いしましたが、それも対等の立場で、お互いの状況を汲み取っていったからこそ実現出来たものです。対等の立場であることによる**対称的な関係性**は、地域の皆様と学生、教職員の間でも大切に育てていきたいと思います。

（４）ティール組織に学ぶ

あたらしい組織運営のあり方としてティール（進化型）組織が注目を集めています。ルールはティール組織が開く突破口として次の３つを挙げています⁴⁾。

- ① 自主経営：階層やコンセンサスに頼らず、仲間との関係性において動くシステムを構成する
- ② 全体性：メンバーは自らの専門分野に限定して合理的に振る舞うのではなく、弱点を含めてそれぞれの持ち味が活かせるような慣行が実践される
- ③ 存在目的 (Evolutionary purpose)：ティール組織はそれ自身の生命力と方向性をもっており、メンバーは、将来どうなりたいか、どのような目標を達成したいか、相互に耳を傾ける

ティール組織は自主経営の組織であり、管理職がなく意思決定は構成員全員で行う等の特徴をもち⁵⁾で、マズローの欲求階層説における自己実現への欲求の段階に相当すると言われます⁶⁾。

前節で述べたように地域貢献活動において学生と教職員は**対称的な関係性**を築くことができます。学生スタッフも、学生たちの「やりたい」と地域連携室の呼びかけが呼応したときに動き始め、室員は学生スタッフの「なりたい」に耳を傾け一緒に作り上げようとしてきました。ここに**グリーン**多元型組織を越えるティール組織の芽を見つけることができるのではないのでしょうか。

ティール組織は「活動目的」ではありませんが、そのような質をもった活動プロセスをイメージすることは今後も大切にしていきたいと思います。今日の地域社会の諸課題に向き合うには多様性への寛容等、一人ひとりが活かされる環境づくりという視点が必要です。そのためにも大学自体が多様性に対する寛容を大切にしていかなければならず、ティール組織の質をもった活動プロセスには学ぶことが多いと思われます。

<注と文献>

- 1) 学生からは「自己責任で行くのだから授業を欠席しての取り組みを認めて欲しい」という要望があります。自己責任で行くことは学外の事業にはそのまま適用されます。地域諸団体からのボランティアの要請について学生に紹介する場合などがあてはまります。
ここでは大学の教職員が主催する事業の要件が問われており、この場合、大学の学生への責任を果たすことも必要です。すべての学生に15コマ分の授業機会を確保することもその一つであり、参加者が多い事業では補講を組む配慮をしています。地域連携室では参加予定の学生が少なく、補講を組むことが現実的でない場合を念頭において欠席分について補講を行うか、授業担当教員から欠席者に補習課題を提示してもらうというコンセンサスを形成しました。
- 2) 日本の大学では、比較的緩い組織的対応のもと自発的な各種の事業が進められてきたと思われます。しかし、この20年ほどの間に教育目的の実現と教育の質の向上のためPDCAサイクルの導入が進められ、学長権限が強化されてきました。いわば順応型組織から達成型組織に様変わりして来たといえます。
アンバー順応型組織、**オレンジ**達成型組織、**グリーン**多元型組織、ティール組織については次の文献を参照してください。
ルール：ティール組織 マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現．英治出版，2018
- 3) 同上書，pp. 57-60
- 4) 同上書，pp. 92-93
- 5) 同上書，pp. 100-121
- 6) 同上書，pp. 73-74

「花園に、山姥？ 2」

地域連携室アドバイザー 石丸 美奈子

山姥は、イシマル一人では、なかった。

★

基本、関係者以外立ち入り禁止（特に、男子禁制）。

なんせ、私立ミッション系お嬢様学校ゆえ。

セキュリティは、万全に。

門を入ると、絶壁、だしね（門番もいるぜ）。

ところが、年に十数回、怪しい人影が・・・。

★

卒業式、入学式、オープンキャンパス、大学祭、入試・・・。

学生とその保護者の来訪は、折り込み済み。

こども対象プログラムやその関係者も。

以外に、年に十数回、怪しい人影が・・・。

★

コホン（引っ張ってすみません）。

実は、

地域に開かれた大学たれ。

というので、西南女学院大学では、一般市民向けの、様々な講座を開催しており。

例えば、年4回の大学連携公開講座（毎回120名定員）。

保健福祉学部が、九州歯科大と共同で、健康に関し。

学生による血圧骨密度血管年齢口腔チェックや、給食提供（減塩食、腸活メニューなど）も。

大人気で抽選になってる。

夏には、シニアサマーカレッジ（60名定員、全10回）。

周望学舎とのジョイントで、文学観光宗教社会見学健康経済国際等、多彩な講義を。

晩秋～冬には、市民カレッジ（30名定員、全5回）。

コミュニケーション、ストレスマネジメントなどを。ゼミっぽく。

その度に、えっちらおっちら、参加者（主にシニア層）が坂を上ってくる、という次第。

★

この山姥軍団（失礼）。



とにかく、リピーターが多い。

まあ、お久しぶり、お元気でしたか、またお会いしましたね、がアチコチで。

加えて、みなさん、超お洒落。

素敵なお洋服や綺麗色の小物をコーディネートして、イキイキと通ってる。

学び直し（リカレント）は、勿論だけど。

もしや、すっかり、女子大生気分？

を、味わうには、最適のキャンパス、なのだ。

花と緑、手入れ掃除の行き届いた構内、歴史あるチャペル、おっとりインテリの教授陣、ホスピタリティ溢れる職員。

そして、現役学生たちの、弾ける若さ、キラキラキラ。

下界とは隔絶された花園で、一気にタイムスリップ、あの頃へ、GO！

★

男は、一生、男子でいられる。

比べて、女性が女子でいられる時期のなんと短いことか。

妻、母、お局、嫁、姑、おひとり様・・・。

パワハラセクハラマタハラワンオペ介護・・・。

幾つもの顔や責務、バトルを経、一周回って、ようやく再び女子に戻る。

その受け皿としての、西南女学院だったとしたら。

リピーター率の高さ、ウキウキお洒落。

ああ、乙女な山姥たちよ。

まとめて、ハグしたいぜ。

★

えー、ちなみに、各講座には、山爺（失礼）も。

少数派ながら、参加してます。

いずれも、ジェントルマン。あくまで礼儀正しくスマートな振る舞い。

これも、西南マジックか。

そういえば、昨秋、本学で講演してくださった、わたせせいぞうさんも。

ちょっと照れて、けど相当嬉しそうに、カッコイイここだけ話を。

彼の作品も、永遠の青春（恋愛）だしね。

★

あ。

毎年12月には、クリスマス礼拝、も開催してます。

キャンパス飛び出して、ソレイユホールにて。



賛美歌、スピーチ（英語・中国語）、キリスト降臨劇、講演、バザーなどなど。

歌アリ、踊りアリ、楽器演奏アリ。

個人的には、これぞ、北九の「宝塚」だ、と。

まもなく一般公開？乞うご期待。

★

今年度は、とかく、女子大生には波乱の一年だった。

医学部では、不条理なアシキリにあったたし。

女子大で、L G B Tの入学を認めるか否か。

週刊誌では、下世話なランキングなどと。

でもって、女性活躍推進と言いながら、相変わらず、先進国最低の登用率。

そんななかにあって。

2022年には、100周年を迎える、西南女学院。

その存在理由は。その存在意義、こそ。

私立で、ミッション系で、この北九の地で。

イマ、と、フタタビ、の女子大生パワー。出番じゃあないか？

★

てなことをつらつら考えつつ。

今日も、ふうふう花園を目指す。

「山姥が、来たぞ〜」。



【石丸氏のプロフィール】



コピーライター

(公財)北九州市芸術文化振興財団理事

西日本工業大学評議員

北九州マラソン実行委員

コピーライターとしてのデビュー作は、マルショク・サンリブ「生活は生もの。」。

八幡東区「響ホール」の名付け親でもある。

これまでにユニクロ、新日鉄、花キューピッド等の広告制作及び、北九州市（周年事業）福岡町（現・福津市総合計画）等自治体の広報を担当。

また、1987年北九州ミズ21委員就任をきっかけに30年にわたり、NHK九州沖縄地方番組審議委員、福岡県行政改革審議委員他、観光振興・教育文化芸術振興・街づくり等の各委員会委員を歴任。

この15年ほどは、外部アドバイザーとして、北九州モノレール社外取締役、井筒屋アドバイザー、西日本新聞北九州本社アドバイザー、北九州市立大学広報アドバイザーに就任。

プライベートでは、毎年夏と冬に超異業種交流会（イシマル組）を主催。

著書に「夕刊を読む女。」がある。

西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動（概要）

本学では感恩奉仕の精神にもとづき、女性らしい豊かな人間力と専門的な実践力で社会に貢献する人材育成を目指しています。座学に加え、学生たちが自ら学外に出向き、さまざまな課題に向き合い、できることをみつけていくことを大切にして参りました。これまでの学生参加の地域貢献活動を活動形態別にみますと次の6つに分けることができます。

- ① 市民公開講座：最新の知識・技術、生活の知恵などを提供する講義や演習
- ② 体験・アクティビティ：あそぶ、たべる、学ぶ、語り合うなどの体験型の企画
- ③ ピアサポートグループ活動：介護や子育ての悩みなどを参加者同士で受けとめ支え合うグループ活動
- ④ 提案とアクション：若い女性の視点を取り入れた商品開発や地域活性化への提案とアクション
- ⑤ 海外における貢献活動：アジア地域での地域貢献活動
- ⑥ その他

また、課題別にみると6つに分けることができます。

- ① 健康・食・運動 ② 福祉・介護 ③ 子ども・子育て ④ 学校教育
- ⑤ 産業・観光 ⑥ 地域づくり

2018年の地域貢献活動は9件でした。『地域活動論叢 2018』では、課題別に＜子ども・子育て支援と学校教育＞、＜食と健康＞及び＜観光と地域活性化＞に分類し（下表参照）、それぞれの1年間の成果と課題をまとめました。本書は、この1年間の学生たちと教職員が地域の皆様とともに歩んだ道りをコンパクトにまとめたものであります。これらが地域の皆様と私たちにとって共通の宝物となりますことを祈念しております。

表 2018年度に本学で実施された地域貢献活動

＜子ども・子育て支援と学校教育＞
・ 生き生きチャレンジキッズ [地域の小学生]
・ 一緒にあそぼう [障がいのある子どもとそのきょうだい]
・ いぼりの森の《みんな、だぁ〜い好き！！》“みんな♪フレイ隊” [地域の未就学児]
・ だいすきにつぼん [地域の小学生]
＜食と健康＞
・ SAT システムを使った食事診断会 [一般市民と学生（ESD センター利用者）]
・ 『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開 [地域住民]
・ 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動 [浅生スポーツセンター利用者]
・ 乳がん検診・自己検診法の啓発活動 [幼稚園に通園する園児をもつ母親]
＜観光と地域活性化＞
・ 北九州市クルーズおもてなしイベント [外国人観光客]

注) [] 内は協働のパートナーあるいは支援の対象です。『地域活動論叢 2018』作成の段階で実施予定のものを含んでいます。

地域貢献活動報告書

1. 企画名 生き生きチャレンジキッズ
2. 主催者 井堀市民センター（北九州市小倉北区井堀3丁目15番2号）
3. 本学代表者 地域連携室 伊東幸雄
4. 参加者 [市民センター] 小学生20名、保護者3名、センター職員4名
[本学] 学生：看護学科2年生4名（三戸田 愛美さん、小野 南夏さん、石田 舞奈さん、濱崎 絢衣さん）、観光文化学科1年生2名（^{すう ぎょさん}鄒 暁芹さん、^{おう れい}王 黎さん）
教職員：藤田保育科准教授、林田会計課会計係長、神山地域連携室職員

6. 概要

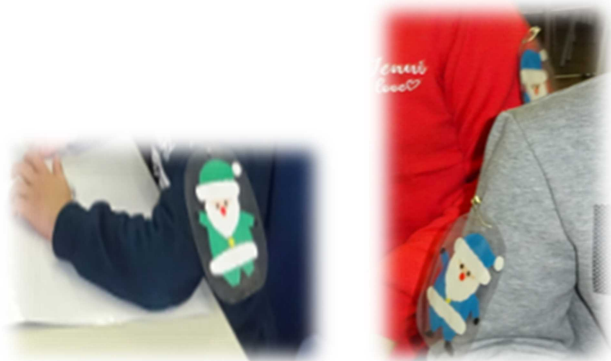
- ・西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部（以下、「本学」という）は、井堀市民センターから、「生き生きチャレンジキッズ—小学校ではできない様々な経験を地域との絆や知識から学んでもらう—」というテーマに沿った企画・運営の依頼を受け、小学生自らが体験できるプログラムを、本学を会場に行うこととなりました。
- ・今年は4回目の開催となります。
- ・今年のテーマは「**”北九州”で遊ぼう!!**」。プログラムは、①北九州市制 55 周年ということで、合併前の旧市の特産品、名所等を盛り込んだゲーム形式による得点競技を実施し、②参加の小学生に大学公式キャラクター「要（かなめ）ちゃん」を描いたプラバンに色付けてもらいました。
- ・日程等は次のとおりです。
 - (1)開催日：2018年12月14日（土）10時～12時30分
 - (2)開催場所：本学2号館
 - (3)プログラム：『テーマは「”北九州”で遊ぼう」』
 - ① チームわけ（赤サンタ、緑サンタ、黄サンタ、青サンタ）



- ②「要（かなめ）ちゃん」に色付け、思い思いの色で仕上げる。

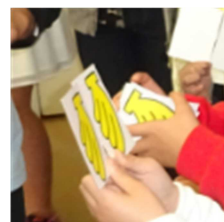


（要ちゃん）



- ③チーム対戦による北九州市合併前の門司、戸畑、若松、八幡、小倉の名物、名所を数える、つくる、動かしました。

門司は「バナナのカード遊び」、戸畑は「美味しいちゃんぽんを作ろう」、若松は「河童の皿、輪投げ」、八幡は「ケーブルカーリレー競争」で得点を競い、小倉は「小倉城のモザイク画」を完成させました。



門司/バナナは何本?多いのはどのチーム
戸畑/カードに書かれたチャンポンの具材でつくりました



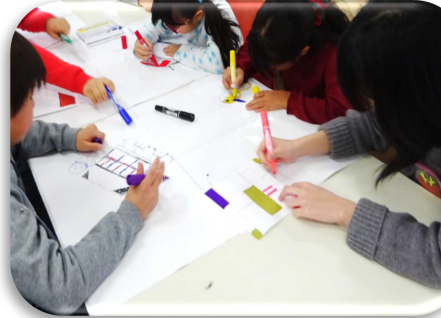
若松/河童の皿はどの野菜に投げ込まれるのか



八幡/日本新三大夜景を見に!!急げ、はやく



小倉/カラフル?不思議?な小倉城が完成しました



7. 評価

- ・今回の企画について、参加者である小学生からは、全員が楽しかった、またやりたいとの評価でした（市民センター集計のアンケートから）。
- ・こどもたちが知らない「北九州」を、特産品や名所を盛り込んだゲーム形式とすることで、自身が育った「まち」以外の「まち」を学んでもらいました。
- ・また、本学の公式キャラクターである「要（かなめ）ちゃん」の要[※]の構成と意味を伝える機会をつくることにより、本学の地域活動が地域の小学生に、地域に広がることを願っています。

※ 要は「西南女学院」の西と女とを組み合わせた文字。体に例えると腰の役割。

8. 御礼

- ・本企画は、本年度が4回目です。市民センターの方々には参加の機会を与えていただき、感謝申し上げます。
- ・学生さんたちには本企画の運営を担っていただきました。子どもたちと直接の交流や準備作業などの裏方を引き受けていただき、無事終了することができたこと、こどもたちには大きな満足感を与えることができましたこと、大変感謝しています。ありがとうございました。
- ・また、本学教職員の関係者の方々におかれましても、通常業務終了後の時間を本企画への提案等に割いていただきましたこと、大変感謝しております。ありがとうございました。

9. 参考

- ・この活動は地域連携室のブログに掲載しています。
アドレスは、<http://www2.seinan-jo.ac.jp/chiiki/?p=800> です。

2018 年度

1. 企画名：一緒にあそぼう

2. 団体名：ちゃれんじ

3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 山本 佳代子

4. 概要

(1) 目的

障害のある子どもときょうだい、その家族を対象とし余暇活動支援を行う。さまざまなレクリエーション活動を通し、子どもたちが楽しく体を動かしながら多様な動きを身につけること、仲間と体験を共有し、一緒に遊ぶ楽しさを知ることとする。またスタッフとして参加する学生は、子どもたちとの関わりを通し、障害についての理解を深めること、場面に応じた声かけや関わり方、プログラムの企画や実践の方法について学ぶことを目的とする。

①対象：障害のある子どもときょうだい、その家族

②内容：体育館でのレクリエーション活動・水泳活動・食育活動・野外活動
(デイキャンプや動物園など)

③活動場所：西南女学院大学第二体育館・障害者スポーツセンター（アレアス）・グリーンパーク他

(2) 実施日時・場所・参加者数・実施内容

	日程	時間	場所	内容	参加者人数	スタッフ人数
1	4月12日(木)	10:00～12:00	福祉学科ボランティア相談室	ミーティング		15名
2	4月19日(木)	16:30～17:30	西南女学院大学第二体育館	レクリエーション	子ども 9名 保護者 6名	6名
3	5月17日(木)	16:30～17:30	524 教室	レクリエーション	子ども 8名 保護者 5名	9名
4	5月27日(日)	13:30～15:00	グリーンパーク	芋苗植え付け	子ども 7名 保護者 7名	6名 山田ゼミ 4名
5	6月21日(木)	16:30～17:30	西南女学院大学第二体育館	レクリエーション	子ども 8名 保護者 6名	10名
6	8月23日(木)	15:30～16:30 16:30～17:30	アレアス(障害者スポーツセンター)	水泳活動	子ども 9名 保護者 7名	5名
7	8月30日(木)	15:30～16:30 16:30～17:30	アレアス(障害者スポーツセンター)	水泳活動	子ども 6名 保護者 5名	5名
8	9月6日(木)	15:30～16:30 16:30～17:30	アレアス(障害者スポーツセンター)	水泳活動	子ども 10名 保護者 7名	6名
9	9月20日(木)	9:00～15:00	足立キャンプ場	スタッフトレーニング		7名 外部講師 1名
10	10月4日(木)	9:30～10:30	福祉学科ボランティア相談室	ミーティング		5名
11	10月18日(木)	16:30～17:30	西南女学院大学第二体育館	レクリエーション	子ども 7名 保護者 5名	10名
12	10月27日(土)	9:00～15:00	足立キャンプ場	デイキャンプ	子ども 14名 保護者 14名 スタッフ 11名 外部講師 1名	11名 外部講師 1名
13	11月3日(日)	13:30～15:00	グリーンパーク	芋堀り	子ども 8名 保護者 10名	3名 山田ゼミ 10名

14	11月15日(木)	16:30～17:30	西南女学院大学第二体育館	レクリエーション	子ども 10名 保護者 7名	11名
15	12月2日(日)	10:00～13:00	西南女学院大学調理室	調理実習	子ども 11名 保護者 9名	5名 山田ゼミ 11名
16	12月6日(木)	10:00～12:30	6201 教室	ミーティング	スタッフ 12名	
17	12月20日(木)	16:30～17:30	521 教室	クリスマス会	子ども 10名 保護者 7名	9名
19	3月23日(土)	8:00～16:00	飯塚ひよこ工場+嘉穂劇場			

(3) インシデントの有無

なし

5. 評価

(1) アウトカム評価

参加者：参加して良かったこととして、「親ができないイベントや遊びを経験できること」「クッキング・芋ほり等をさせていただき、食べられるようになりました」「家にいると母と二人で遊びや経験が乏しいけど、学生さん達に家ではできないダイナミックな遊びや工作など企画してもらえて、子どもの興味や能力に気づけた」などの感想をいただいた。

学生：「子どもたちの意外な一面や行動をみるのがとても楽しく、また楽しそうに活動してくれることがとても嬉しい」「子どもの成長をみるができる」「頼れる仲間がいてとてもありがたい」「子どもの成長に合わせたプログラムを考えたい」「今までの活動を上回る楽しさの活動をする」などの声がきかれた。

(2) プロセス評価

参加者：イベント終了後のアンケート実施、活動中に保護者と意見交換をすることで保護者の希望を把握した。

学生：毎回の活動後、子どもの様子や自分自身の関わり方、気になった点などについて記録を作成し活動を振り返る。記録を全体で共有し次の活動につなげる。

(3) 企画の妥当性と今後の課題

参加率やアンケートから、参加者の満足度は高いと考えられるが、授業の都合で定期的に参加できないスタッフもいるため、毎回の活動は人手が足りず、保護者の協力も得ながら実施している状況である。定期的に参加できない学生が、子どもの様子や保護者のニーズを共有できるよう、随時ミーティングを開催し、急な参加でも子どもと適切に関われるようにしている。参加を希望している子どもも控えており、スタッフの増員が課題である。

6. 決算

西南女学院大学地域貢献活動助成金：40,510 円（講師謝金他） 子どもゆめ基金：161,000 円

7. 謝辞

活動に子どもたちを連れてきて子どもたちと触れ合う時間を作ってくださいる保護者に感謝致します。次に、子どもたちが楽しく活動できるよう、活動の企画、事前準備、当日の運営、次回に向けた振り返りに真摯に取り組み、共に活動を作り上げてくれた学生スタッフに感謝申し上げます。

また、今年度初めて取り組んだデイキャンプでご指導いただきました、北九州市立大学の村江史年先生、食育活動と一緒に取り組んでいただいた栄養学科の山田志麻先生とそのゼミ生の皆様、グリーンパークの皆様に心より感謝申し上げます。

8. 添付資料

写真資料

足立青少年の家 デイキャンプ



4月：こいのぼり作成



体育館でレクリエーション活動



こいのぼり完成



芝生広場でキャタピラー競争



グリーンパークで芋ほり

芋のつるを切る
お父さんを応援



山田ゼミによる
親子クッキング

地域貢献活動報告書

1. 企画名

いぼりの森の《みんな、だぁ〜い好き！！》

みんな♪フレアイ隊

2. 主催者名 井堀市民センター

3. 企画代表者 西南女学院大学短期大学部保育科 藤田稔子

4. 概要

(1) 活動の概要と目的

いぼりの森の《みんな、だぁ〜い好き！！》は、0・1・2 歳児を中心とした未就園児とその保護者を対象に、井堀市民センターで実施する子育て支援活動です。通常月に 2 回、北九州市の保健師・看護師の「子育て相談」＋子育てサポーターの「あそび支援」と、我々フレアイ隊が交互に開催しています。フレアイ隊は、保育科 2 年「こども学特別演習」の藤田ゼミの活動の一環として位置付け、今年で 3 年目となります。

フレアイ隊の活動は、学生が年間計画を立案し、自らの目的・目標を掲げて実施します。

今年度の学生達が掲げた目的・目標は、以下の通りです。

- ①市民センターを拠点にした“井堀のまち”の地域活性化を目指します
- ②幼稚園、保育園に通っていない子どもと保護者、学生の交流の場を作ります
- ③実習以外の場において、自分達で考え計画した活動を行い、子どもや保護者と触れあうことで保育実践力を高めます

(2) 開催日、内容および参加人数 (8 月までは第 4 水曜、11 月からは第 4 木曜 9:20~10:00)

開催日	内容	参加者人数
4 月 25 日	『花さかじいさん』 ～パネルシアター～	子ども 11 名 保護者 10 名
5 月 23 日	『お店屋さんごっこ』 ～ごっこあそび～	子ども 12 名 保護者 10 名
6 月 27 日	『おむすびコロコロ』 ～触れあいあそび～	子ども 10 名 保護者 9 名
7 月 25 日	『夏祭り』 ～ごっこあそび～	子ども 23 名 保護者 17 名
8 月 22 日	『飛んでったバナナ』 ～エプロンシアター～	子ども 13 名 保護者 10 名
11 月 22 日	『ちびっこ運動会』 ～運動あそび～	子ども 8 名 保護者 8 名
12 月 20 日	『クリスマス会』 ～製作あそび～	子ども 12 名 保護者 12 名
1 月 24 日	『みんなで鬼退治！』 ～製作あそび・豆まき～	子ども 7 名 保護者 7 名

*今年度、新規参加者は、25 名でした。

*取材：4/25 J:COM デイリーニュース

11/22・12/20 毎日新聞

12/20 北九州市子ども家庭局

(3) 活動の特徴

①バナナくん体操

プログラムは、身体と心のアイスブレイクとして、バナナくん体操で始まります。バナナくんのコスチュームは学生がオリジナルに作製し、今年度のフレアイ隊のマスコットの存在となりました。

②時間をかけた準備

就職後の現場では難しい手間暇をかけた準備を心がけました。特にごっこあそびの道具は、耐久性の高い品質にこだわりました。その結果、子ども達は、会が終わった後もフリースペースで繰り返しあそぶ姿が見られ、保護者も喜んで自宅に持って帰ってくれました。

③安全性の保障

参加してくれる子ども達の大半が 0 歳児であるため、あそびの内容はもちろんのこと、特に安全面に関しては、十分に配慮し、今年度も最終回まで事故等問題なく終了しました。具体的には、大きさや素材に配慮し、子どもが口に入れたとしても安全なものに徹底しています。また、誤って顔や頭に当たっても安全な様に、例えば、1 月の豆まきでは豆の代わりに子どもが握りやすいサイズのお手玉にして、中身はストローを細かく切ったものを入れる工夫をしました。

5. 評価

フレアイ隊のリーダーが中心となり、各回当日の内に次回のことについて話し合いが持たれ、徹底した役割分担のもと、企画運営されました。今年度は特に、当日の現地でのリハーサル、センターとの念入りな打ち合わせを心がけました。その結果、現地ならではの微調整が余裕を持って可能となり、落ち着いた活動になりました。また、学生自身が自らの成長を感じることができており、同時に参加して下さった保護者やセンター職員からも、学生へのフィードバックが頻繁におこなわれており、毎回手応えを感じる学びの場となっていました。

6. 活動経費

井堀市民センターの経費でさせていただきました。

7. 今後の課題

- ・今年度も、活動の次の時間が授業の為、慌ただしく帰校しています。参加者の皆様には、活動終了後は忙しなく対応することになり、申し訳ないと思っております。
- ・時間割上どうしても融通が利かず、他団体に便宜を図っていただきました。地域貢献活動の継続には、時間割等の配慮をいただければ活動が困難になります。今年度は、後期、ゼミの時間が午後になったため、強引に休講することで補講として活動日程を確保し辛うじて実施できましたが、不安を感じました。

8. 御礼

井堀市民センターの館長様はじめ職員の皆様、子育てサポーターの方々には、学生達を心底可愛がってくださり、共に育ててくださることに感謝いたしております。また、毎回楽しみに参加して下さる子ども達とお母様にも深くお礼申し上げます。

9. 添付資料

広報用チラシ、実施時の様子、取材記事（写真資料）

以上

📌開催案内チラシ

いぼりの森の「みんな！だぁ～いすき！」					《井堀市民センター》				
2018年度 みんな♪フレイアイ隊 年間予定表					2018年度 みんな♪あどび隊 年間予定表				
西南女学院大学短期大学部 学生担当					子育てサポーター、子育てボランティア担当				
前期第4水曜日 9時20分～10時					通年第1水曜日 10時～11時30分				
	月	開催日	テーマ	内容		月	開催日	テーマ	内容
第1回	4月	4月25日(水)	「花さかじいさん」 	パネルシアター	第1回	4月	4月4日(水)	はじめまして	今年度も元気に楽しく！
第2回	5月	5月23日(水)	「お店屋さんごっこ」 	ごっこあそび	第2回	5月	5月2日(水)	子どもの日	こいのぼり 
第3回	6月	6月27日(水)	「おむすびコロコロ」 	ふれあいあそび	第3回	6月	6月6日(水)	親子リズム体操	みんな元気にリズムに合わせて
第4回	7月	7月25日(水)	「夏祭り」	ごっこあそび	第4回	7月	7月4日(水)	七夕祭り 	お星さまにお願いを…
第5回	8月	8月22日(水)	「とんでったバナナ」	エプロンシアター	第5回	8月	8月1日(水)	楽しいお話	紙芝居、手遊び…
第6回	9月	9月26日(水)	学生が実習中 お休み		第6回	9月	9月5日(水)	むかしあそび	お手玉、けん玉など
第7回	10月	10月24日(水)	学生が実習中 お休み		第7回	10月	10月3日(水)	いぼりオリンピック 	メダルづくり
後期第4木曜日 9時20分～10時					通年第1水曜日 10時～11時30分				
	月	開催日	テーマ	内容		月	開催日	テーマ	内容
第8回	11月	11月22日(木)	「ちびっこ運動会」 	運動あそび 	第8回	11月	11月7日(木)	秋のコンサート	楽器を使って
第9回	12月	12月20(木) このみ第3	「クリスマス会」 	製作あそび	第9回	12月	12月5日(木)	クリスマス会	お楽しみ！！
第10回	1月	1月24日(木)	「みんなで鬼たいじ！」 	製作あそび・豆まき	第10回	1月	1月2日(木)	正月休み	
第11回	2月	2月28日(木)	学生が学校行事等 お休み		第11回	2月	2月6日(木)	だるまさんが…	ころんだ？ 
第12回	3月	3月28日(木)	学生が学校行事等 お休み		第12回	3月	3月6日(木)	お楽しみ会	？
☆ 前期と後期で曜日が違いますので、ご注意ください。					☆ 第1水曜日は、「子育て相談」も併せて実施しています。				

📌活動の様子



📌活動の様子が掲載された記事（毎日新聞）



地域貢献活動報告書

だいすき にっぽん

子どもたちに伝えたい「食」と「あそび」と「ことば」

1. 企画名

2. 主催者名 学校法人 西南女学院 『だいすき にっぽん』実行委員会

3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 稲木光晴

4. 概要

(1) 活動の概要

日本の四季折々の慣習や年中行事には、昔の人々の「智慧」「技」「願い」が込められています。この想いを大切に、大学・大学短期大学部の教職員と地域の職人から次代の社会を担う大学生・短大生へ、そして小学生とその家族へ、伝承していく活動で、今年で5年目となります。

(2) プログラム構成

毎回、10:00-15:00 の時間帯で決まったプログラム進行、「食」「ことばあそび」「あそび」の内容で実施しています。

「食」: 栄養学科青木ゼミを中心に、栄養面、内容等を多面的に考えられたメニューで、解説の後、子どもと保護者と共に調理実習をおこないます。白米になるまでの手作り教材を用いたお米の解説は、とても好評でした。

今年度は、北九州市農林課のご協力を得て、北九州産の野菜を学ぶ機会を得ました。また、最終回では和風クリスマス料理をビュッフェスタイルで楽しみました。

「ことばあそび」: 生活の“音”動物の鳴き声、日本語と英語では随分と異なります。そのような発見を楽しめるゲームで学びました。また、「雨」にまつわる美しい日本語の数々にも触れました。

「あそび」: 今年度は、第1回目は保育科末寄先生と末寄ゼミのみなさん、第4回目は英語学科スワンソン先生とボランティア学生さんと共に実施しました。お助け隊の企画では、雨の時期を楽しむため、ビニール傘に絵を描いてオリジナル作品を作ったり、北九州旧五市を取り上げたあそびを考案し、運動会形式で実施したりしました。

これらのプログラムの企画運営は、大学保健福祉学部福祉学科・栄養学科、人文学部英語学科・観光文化学科、短期大学部保育科の学年も異なる、普段は接する機会が少ない仲間たちの集まりで話し合わせ準備し実施されています。また、学生達の間で「だいすきにっぽん」を続けたい」という思いから、次の学年へと引き継ぎがおこなわれています。

(2) 対象者と開催場所

募集人数は、小学生 30 名程度。

開催場所は、西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

(3) 内容および参加人数

開催日	実施内容	参加者人数
第1回 (6/30)	「食」 七夕ちらし寿司 他 「ことばあそび」 “音” にまつわることばあそび 「あそび」 シャボン玉あそび・ステングラス作り Special thank you : 末寄先生&末寄ゼミ	子ども 25 名 保護者 15 名

第2回(8/21)	「食」ドライカレー、おはぎとずんだ餅 他 「ことばあそび」 “雨”にまつわることばあそび 「あそび」 素敵な傘作り・水あそび	子ども 22名 保護者 13名
第3回(11/3)	「食」北九州の農業のお勉強、野菜づくり料理 「ことばあそび」 野菜・果物ビンゴゲーム 「あそび」 オリジナル北九州づくり大運動会 Special thank you: 北九州市農林課の皆さま	子ども 12名 保護者 8名
第4回(12/22)	「食」和風クリスマス料理 ビュッフェでどうぞ 「ことばあそび」 クリスマスのお菓子 「あそび」 クリスマスカード作り・ダンス Special thank you: スワンソン先生&学生さん	子ども 26名 保護者 17名
番外編 (8/24・25)	・古着でコースター作り ・ヒンメリ作り *お昼は、7号館学食で生協さん特別メニューをいただきました。 Special thank you: 生協の店長さん&皆さま	子ども 11名 (延べ人数)

5. 評価

- ① 各部門で活動および計画の振り返りを行い、次回につなげます。
- ② 毎回の運営会議で、共有すべき事項は共に話し合い改善策を講じます。
運営会議は、その回の中心メンバーが集まり、議事進行は“お助け隊”リーダーが担います。
運営会議には教職員も陪席しますが、毎回学生達だけで十分な話し合いがなされています。
- ③ 実施日当日は随時、参加者の子ども達と保護者に感想を求め、要望や改善点を聴取します。

6. 活動経費

個人研究費(栄養学科 青木、保育科 藤田)

参加費 1名¥500

7. 今後の課題

- ・昨年度の課題が全く改善されないままであったため、学生の活動への環境の不便さは今後も課題として残っています。
- ・活動助成金が獲得できなかったため、活動資金がなく苦しい実施となりました。次年度は、参加費を値上げする等の対策を講じていきます。

8. 御礼

今年度は、北九州市農林課のご協力を得ることができました。野菜の仕入れからお土産まで準備してくださり、また、北九州の農業について分かりやすく解説してくださいました。数回にわたり打ち合わせにお時間をさいてくださり、また、当日の運営と大変お世話になりました。感謝申し上げます。さらに、今年度は保育科末寄先生、英語学科スワンソン先生にもご尽力いただき、感謝です！お手伝いくださいましたゼミ生やボランティア学生さんにも心からお礼申し上げます。そして！毎回楽しみに来てくれる子ども達、保護者の皆様あつての「だいすき にっぽん」です。ありがとうございます。

実行委員長はいつも申します「この“だいすきにっぽん”は学生さんがいてくれるからこそできる活動です」、学生スタッフ全員に最大級の“ありがとう”を。そして、この会に関わる応援してくださる方も含め、全ての皆さまに心からお礼申し上げます。

9. 添付資料

広報用チラシ、実施時の様子(写真資料)

以上

↓ポスター

だいすき
にっぽん

2018

子どもたちに伝えたい
「食」と「あそび」と「ことば」

西南女学院で
「日本の伝統文化」にふれてみよう

6.30 土 たなばた

《食》七夕料理
《あそび》しゃぼん玉で天の川をつくろう



8.21 火 夏休み

《食》夏バテ対策料理
《あそび》夏休み終盤 残暑を楽しもう



11.3 土 文化の日

《食》北九州の野菜を食べよう
《あそび》新ご当地ゲームであそぼう



12.22 土 クリスマス

《食》日本料理でクリスマス
《あそび》いつもと違うお祝いをしてみよう



8.24 金 25 土

番外編もあるよ!

●開催時間 10:00-15:00(受付9:30)

●開催場所 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

●参加人数 小学生30名程度(先着順)

●参加費 1名につき、500円(保険加入料・食料費)

●お申込み hayashida@seinan-jo.ac.jp 締切日 各日、開催日の3週間前まで

●主催 西南女学院「だいすき にっぽん」実行委員会 代表 稲本光南

●お問合せ 西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部 会計課 林田正雄
093-583-5149 hayashida@seinan-jo.ac.jp



西南女学院大学
西南女学院大学短期大学部

↓だいすき にっぽん の家紋



今年度の「食」リーダーと
「お助け隊」リーダーが
「食」の稲穂&「あそび」独楽
の絵柄を選びプロの
デザイナーさんに融合して
もらったオリジナル家紋です。

👉 ちらし寿司に金糸たまごの天の川とにんじんの星さま☆



👉 手作り教材：白米の誕生



👉 こねこね おはぎ作り



👉 なんと！和風グラタン



👉 北九州市農林課の課長さん講義



👉 ことばあそび真剣です

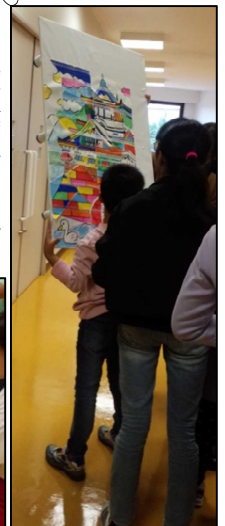
👉 シャボン玉あそび、楽しかったね♪



👉 世界に1本の傘🌂



👉 小倉城モザイク画



👉 マルコムサンタさんと一緒にカード作り



👉 若松の河童の皿投げ競争



1. **企画名**：SAT システムを使った食事診断会

2. **組織名**：まなびと ESD ステーション～食から始まる健康プロジェクト～

3. **代表者**：境田靖子（保健福祉学部栄養学科）

4. 概要

【目的】北九州市食育に関する実態調査¹⁾（2012）によると、「朝食を毎日食べる人の割合」は20歳代男性で48.6%、女性で58.6%、「家庭で調理した夕食を食べる頻度」は20歳代男性で毎日が28.6%、女性38.1%とすべての世代の中で最も低く、他に「食育についての関心度」は20歳代男性で関心があると答えた者は22.9%、女性で33.8%と、若い世代の食に関する問題点が数多く抽出されている。一方で、北九州市は政令市の中でも、高齢化率が最も高いにも関わらず、男性の平均寿命78.95と健康寿命77.34の差は1.61年、女性の平均寿命86.46と健康寿命の差は3.68年と、全国平均男性1.47、女性3.23に比べ長いことから²⁾、高齢者の低栄養やロコモティブシンドロームなどによるQOLの低下が危惧されている。しかし、行政が行う健康教室や栄養相談は、もともと食や健康に高い興味を持つものしか参加せず、無関心期にある者が自分の食実態について把握し、改善意欲をもつ機会は少ない。以上のことから、市民が健康でいきいきとした生活を営み、活力のある社会を実現するために、適切な食事量や食事バランスといった正しい食知識の提供を行い、市民の健康増進に寄与することを目的とする。

【対象】（ESD ステーションの前を歩行中または ESD に活動に來ている）市民および大学生

【内容】

1) 実施方法

① ESD ステーション前を通行中の市民にチラシを配布しながら声をかける（写真1）。

② SAT システムの料理サンプルの中から、「自分が食べた料理（またはそれに近いもの）やこれから食べようと思っているもの」を選択し、トレーに1食分の食事を乗せる。

③ トレーを SAT 診断の読み取り機に乗せ、食事を診断、パソコン表示および結果印刷。

④ 選択した食事内容の診断結果が出力された用紙を用いて、食事量についてスタッフ学生が説明（写真2）。

※食事診断 SAT システム〔(株) いわさき〕とは・・・エネルギーやたんぱく質などの栄養情報が搭載された IC タグのついた実物大の立体料理模型を選び、読み取り機に乗せると、選択した料理に関する栄養価計算の結果が瞬時にパソコンに表示され、栄養バランスを星5つで5段階評価する。写真等の平面媒体と違い、具体的な量を示し、触ることができるため、選んだ食品の量的な把握や共有がしやすく、指導者にとっても対象者にとっても、わかりやすい栄養相談ツールである。

2) 日時：2018年5月12日（土）、5月26日（土）、6月9日（土）、7月7日（土）（台風により ESD ステーション閉鎖のため中止）、9月29日（土）（プリンターの故障により中止）、11月18日（日）

12月8日（土）13時～16時

3) 場所：まなびと ESD ステーション（北九州市小倉北区魚町3丁目3-20 中屋ビル地下1階）

4) 実施者：栄養学科4年 7名

事前に、6パターン程度の食事診断の結果サンプルをもとに、ペアで結果解説のトレーニングを行い、本番に臨んだ。

5) 参加者：食事診断を行った市民 合計 69 名

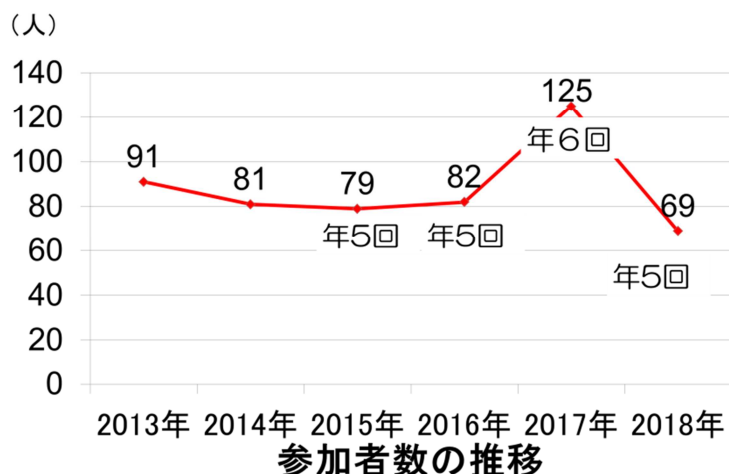
（18歳未満1名、18～29歳15名、30～49歳11名、50～69歳18名、70歳以上24名）

6) インシデント：特記事項なし

【評価】

1) 参加者の減少

施設前でのチラシ配布には、道路使用許可証が必要なことが判明したため（写真 1）、今年度から対応することとしたが、許可証が間に合わなかった 5 月の実施回は敷地内からの声掛けのみだったため、参加者が非常に少なくなった。また、7 月の台風、それにより翌実施回まで 3 か月以上空いたことで 9 月はプリンターが故障、計 2 回中止となったことから、昨年と比較し、参加者がかなり減少することとなった。



2) 実施後の学生による「実施内容の振り返り」と自己評価

実施後に、参加学生で結果説明の内容と相談事項の共有（カンファレンス）を行い、後日、レポートに要点をまとめる学習を行った。レポートには、①結果説明時に困ったこと、②その時に、どう対応したか、③市民の方と関わることで、自分自身の新たな気づきや発見、または今後の課題は見つかったかの 3 点についてまとめレポートを提出し、後日、教員からのコメントを挿入し、学生に返却した（表 1）。さらに、学生による事前・事後の自己評価測定を今年度は取り入れた。「管理栄養士という資格取得を誇りに思う」「診断結果から現状を把握する力がある」についての変化は本活動の成果と考えられるが、他に変化のあった「代謝を理解」「改善案提案」「食事摂取基準」「行動科学理論」は本活動以外に、国家試験の学習が進んだ影響も考えられる（表 2）。

表 1 学生による振り返り

・一般の方が最も情報を得やすいテレビの情報もこまめにチェックする必要がある。 ・話している人の目を見て対応をすることや笑顔で聞くことや合図などを打つなど、授業で習った細かなこと大切だと実感。 ・食などにこだわりが強い方もおり、行動変容を促すことの難しさや、自分の意見を押し付けるのではなく、話をよく聞き、相手を受容することが大切だと感じた。 ・糖尿病や腎臓病や呼吸器系の疾患をお持ちの方も診断を受けてくださり、実際に大学の授業で学んだ調理	・様々な考えを持って、食事を行っている市民の方とお話しさせていただく中で、自分の食に対する考えも広がったように思う。 ・栄養学について学びたい！と思う気持ちがさらに高くなった。 ・アドバイスをした後、知識も浅い学生に対しありがとう、これから気を付けなきゃねとおっしゃっていただき、これからなる「栄養士という仕事」をととても誇りに思った。 ・評価結果の説明が終わった後に市民の方から、お礼や「頑張ってるね」等声をかけられたことがあり、
--	---

方法のアドバイスなどを少しすることができ、大学で学んできたことの大切さを感じた。

もっと丁寧でわかりやすい説明やアドバイスができるようになりたいと思った。

表 2 学生による事前・事後の自己評価（5 点満点）

項 目	4 月	12 月
資格取得を誇りに思う	4.00	4.86
管理栄養士という職業に向いていると思う	2.86	3.29
職を通じて、健康と幸せに寄与したい	4.29	4.57
専門的な技術と知識を向上させたい	4.43	4.57
診断結果から現状を把握する力がある	2.71	3.71
資料を活用できる	3.29	4.00
代謝を理解し、説明できる	2.14	3.29
献立紹介など具体的改善案を提案できる	2.86	3.43
嗜好・病歴に応じた改善案を提案できる	2.43	3.00
食事摂取基準を活用できる	2.71	3.71
行動科学理論やモデルを活用できる	2.71	3.29
カウンセリングスキルを活用できる	3.00	3.43

【決算】 地域貢献活動助成 (支出) PC プリンターインク 5580 円
カイロ 556 円
交通費 27880 円

【文献】

- 1) 北九州市保健福祉局：平成 24 年北九州市食育に関する実態調査・調査結果について、北九州市印刷物登録番号第 1210190F 号，2013 年
- 2) 北九州市：北九州市健康づくり推進プラン，北九州市印刷物登録番号第 1210148A 号，2013 年
- 3) 北九州市：第二次北九州市食育推進計画，北九州市印刷物登録番号第 1310147A 号，2014 年



写真 1 呼び込みの問題



写真 2 市民の方へ結果説明

地域貢献活動 成果報告書

1. 企画名：『食と健康』に関する地域密着型食育活動の展開
2. 主催者名：西南女学院大学保健福祉学部・九州歯科大学口腔保健学科
3. 企画代表者：西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 田川辰也

4. 概要

(1) 活動の経緯と特色

すべての国民が心身の健康を確保し、生涯にわたって生き生きと暮らすためには、何よりも『食』が重要である。食の多様化により引き起こされた生活習慣病やメタボリックシンドロームの蔓延を解決するためには、食育としての取組が必要である。そこで、本学栄養学科および九州歯科大学は、2014年度より、地域住民の健康増進に貢献することを目的とした『食と健康』に関する公開講座を開催している。本取組は『講義』と『食事提供・食育イベント』をセットにした学生参加型の社会貢献事業であり、現在、本取組は5年目を迎えている。本取組は地域と大学との連携を深め、地域住民への食に関する普及啓発活動を推進し、健康寿命延伸のための社会貢献事業の構築を目指すと同時に、両大学の学生が一連の食育推進活動を実体験することにより、社会貢献ならびに専門職業人としての意識を高め、専門的知識を備えた人材養成を推進する。

(2) 対象と開催場所

参加者：北九州市の地域住民 開催場所：西南女学院大学8号館8101教室

(3) 実施日時、参加者数、実施内容

◆ 第1回

開催日	6月30日(土)	一般参加者数	124名
講演テーマ	知って欲しい日本人に多い脳卒中～『寝たきり』にならないために～		
講師	西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 田川辰也教授		
給食	『DASH食』		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、食塩相当量の展示		

◆ 第2回

開催日	8月25日(土)	一般参加者数	119名
講演テーマ	『今どき、まさかの低栄養！？～食生活を見直して老化予防を！～』		
講師	西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 境田靖子講師		
給食	『低栄養予防食』		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、栄養ワンダー、体重測定、歯科相談		

◆ 第3回

開催日	10月21日(土)	一般参加者数	139名
講演テーマ	『北九州の郷土料理～糠床・糠炊きの魅力発見～』		
講師	北九州小倉・糠床糠炊き研究会 波多野淳子顧問		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、舌圧測定、咀嚼ガム		

◆ 第4回

開催日	12月1日(土)	一般参加者数	130名
講演テーマ	『食べる機能について学んでみよう！～食事の時に“むせる”ことはありませんか？～』		
講師	九州歯科大学口腔保健学科 藤井航教授		
給食	『しっかり噛んで骨太御膳』		
イベント	血圧測定、血管年齢測定、骨密度測定、酸産生能の検査、唾液の検査		

(4) インシデントの有無：なし

5. 評価

(1) アウトカム評価

2016 年度までの申込数平均 134 名から 2018 年度は 156 名と、応募数は増加しており、本取組に対する地域住民の関心および満足度の高さが窺える。また、2016 年度は参加者より 200 円、2017 年度は 300 円を食事代として徴収したが、応募数および参加者数が減少することはなかった。

4 年間で計 19 回実施しているが、2018 年度最終回参加者の約 40%が 6 回以上の参加経験あり、リピーターが多いことが本取組の特徴と言える。参加者(地域住民)は講演の聴講に加え、講演に関連した食事の喫食やさまざまな体験型イベントへの参加により、自身の身体状況や生活習慣を顧み、食生活や運動状況等の生活習慣改善への強い動機づけに繋がっている。

(2) プロセス評価

本事業は、教員と学生の協働による、地域住民を対象とした健康と食に関する支援活動であるとともに、将来を担う専門的知識を有する人材の養成・育成を目的としている。そのため、本事業への学生(主として 4 年生)の積極的参加を促しており、学生は食育イベント(血圧測定、骨密度測定、骨密度測定、食塩相当量の展示等)および講演後の食事提供(献立作成、検収、大量調理等)を担当する。両大学の学生が一連の食育推進活動を実体験することにより、社会貢献ならびに専門職としての意識を高めることに繋がるものと考ええる。

(3) 企画の妥当性と今後の課題

年度初めの 4 月にミーティングを開催し、実施日および演者を決定、講演テーマについては前年度アンケートから、地域住民の関心が高いものを取り入れている。食育イベントについては毎回、骨密度測定(骨活レシピの作成含む)、血管年齢測定、血圧測定、食塩相当量の展示等、指導教員と学生スタッフとで、展示内容を検討し、実施している。食事提供についても、献立決定から試作、栄養教育媒体(リーフレット)の作成まで学生が行っている。また今年度は、(公社) 日本栄養士会が実施する食育キャンペーン『栄養ワンダー』を 8 月に取り入れ、協賛品の提供もあったため、大変好評であった。10 月は趣向を変え、北九州の地域食である『糠炊き』をテーマとした講演と糠炊きの実演を実施し、テーマとしてはチャレンジであったがこちらも好評であった。

本取組では、参加者にはリピーターが定着し、講座への参加が市民交流の場となり、健康増進に対する意欲向上だけでなく、高齢者の閉じこもり予防等にも繋がっていると考えられる。今後の課題として、継続実施のため、学内外の研究費の獲得を積極的に行い、新規参加者を促すために近隣市民センターへの広報活動等を検討している。また、現在、事業実施は主に 4 年次学生が行っているが、今後は 1~3 年次学生の参加を促し、早期体験学習としての運用も検討する。

6. 決算

決算途中のため、後日提出します。

7. 謝辞

本事業の一部は、『2018 年度西南女学院大学共同研究費』により、実施されたものである。また、本公開講座にご参加いただきました地域住民の皆様ならびに多大なるご協力を賜りました西南女学院大学および九州歯科大学の教職員・学生の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

8. 添付資料

- ・写真資料
- ・決算報告

写真資料



写真 1：講演



写真 2：食育イベント(血圧測定)



写真 2：食育イベント(骨密度測定)



写真 4：食育イベント(栄養相談)



写真 5：食育イベント（8月栄養ワンダー）



写真 6：給食提供（しっかり噛んで骨太御膳）

1. 企画名 地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動
～スポーツ施設を利用する地域高齢者の栄養状態と身体状況について～
2. 主催者名 西南女学院大学及び戸畑スポーツコミュニティ事業団 健康増進活動
組織名 北九州市立 浅生スポーツセンター(株式会社オリエンタルコンサルタンツ)
3. 企画代表者 西南女学院大学 保健福祉学部 栄養学科 講師 山田志麻
福祉学科 稲木光晴教授、山本佳代子助教、栄養学科 石井愛子助手
北九州市立 浅生スポーツセンター 総括責任者 川本卓史

4. 概要

(1) 背景及び目的

浅生スポーツセンターは、地域住民が気軽に利用できるスポーツ施設として有用であると考えられるが、これまでにスポーツ施設等では、運動と食事や栄養について気軽に相談できる窓口がなかったのが現状である。そこで本研究は、運動習慣のある高齢者を対象に、食事の摂り方や栄養のバランス、身体組成を把握し、健康で元気な高齢者の身体づくりを行うため、定期的に食事指導や身体組成の測定を行うことで経時的変化をとらえ、生活習慣の改善、低栄養の予防などを踏まえた、健康の維持増進を目的としている。

実態を把握するため、運動習慣のある高齢者を対象に1年間(年4回)の調査を行った結果、94名中やせが8名、肥満が21名認められ、サルコペニアに該当する者が8名であった。生活習慣病やがんを罹患している者、嚥下機能が低下している者も認められた。

そのため、今後も継続的に調査を行い、①参加者の経時的推移(やせおよび肥満者)と②栄養状態と栄養摂取状況、また、身体組成の関連を検討する。

(2) 対象者及び開催場所

対象者：平日の浅生スポーツセンター利用者(主にシニアを対象とする)

※診断や測定結果の利用について説明を行い、同意を得られた方に行った。

実施日：2018年9月、12月、3月の平日(午前・午後)の3日間

実施場所：浅生スポーツセンター 会議室

参加者数：1クール10～15名

(3) 実施内容

ソフトを使用した簡易栄養診断および栄養相談による食生活の見直しを、体組成測定(InBody)、血色素測定(ASTRIM FIT)を利用したモニタリングにより、体組成分析(適正体重、筋肉量、脂肪量、肥満指数、部位別筋肉量や部位別脂肪量)や貧血チェックを行い、運動や日頃の活動に見合った食事の提案を行った。1人当たり所要時間は10～15分程度としました。記入用紙は、同意書、食事チェックシート、高齢者用アンケートの3枚、配布用紙は、食事診断結果表、InBody結果表、血色素測定表の3枚としました。

5. 評価

2017年に4回行った栄養相談の初回データをまとめた概略を以下に示す。

【結果】

対象者は男性 26 名、女性 68 名の計 94 名で、男性の平均年齢は、 72.1 ± 6.2 歳 (62-88)、女性の年齢は 72.0 ± 4.9 歳 (63-85) でした。男性の身長は 169.1 ± 7.0 cm、体重は 65.9 ± 9.2 kg、女性の身長は 152.5 ± 5.5 cm、体重は 51.9 ± 8.8 kg でした。男性の BMI は 23.0 ± 2.6 、女性の BMI は 22.3 ± 3.5 で、その内訳は、やせ 8 名、標準 65 名、肥満 21 名でした。既往歴は高血圧が 28% と最も多く、次いで高脂血症 17.9%、糖尿病 15%、骨折 14%、糖尿病 10% の順であった。また、体組成測定より、身体機能が低下している者は、男性 3 名、女性 13 名、筋量の減少が認められた者は、男性 4 名、女性 28 名であった。サルコペニアは、女性 8 名でした。また、生活機能についてアンケートを行った結果、「友人の家を訪ねていますか」(社会参加)、「階段を手すりや壁をつたわずに昇っていますか」、「転倒に対する不安が大きいですか」(運動器)、「6 ヶ月間で 2~3kg 以上の体重減少がありましたか」(栄養)、「お茶や汁物等でむせることがありますか、口の渇きが気になりますか」(口腔機能)、「昨年と比べて外出の回数が減っていますか」(閉じこもり)、「今日が何月何日かわからない時がありますか」(物忘れ)、「最近、以前は楽にできていたことが今ではおっくうに感じられる」(うつ) の割合が高い傾向がみられた。サルコペニアの女性は、「バスや電車、自分の運転で 1 人で外出していますか」(社会参加)、「半年前に比べて固いものが食べにくくなりましたか」、「口の渇きが気になりますか」(嚥下口腔機能) が有意に低下していた。

個別に体組成の経時変化を見ると、減量と共に筋肉量が増し体脂肪率が低下した者、あるいは、けがや体調不良のため、運動が出来ず体重が増えた者など個人間で差が見られた。

【結論】

本調査の結果から、地域に在住する比較的活動量が多い自立した高齢者であっても、筋肉量が減少し、身体機能が低下している可能性が示唆された。また、減量は、体組成測定により得られた筋肉量や体脂肪率の増減等の結果よりアドバイスをを行い、運動の質や量、食欲、食事内容や食事摂取量等からのアプローチが必要である。

6. 決算

活動助成金：50,000 円

支出：ポータブルプリンター、他消耗品 49,356 円

7. 今後の課題：

- ・ 学生の授業に支障のないスケジュール調整
- ・ リピーターの個人対応及びその後の追跡
- ・ 利用者の要望に見合った調理実習や試食の検討
- ・ 健康体操教室、食育講座、スポーツ栄養学講座などの講座の開催を検討

8. 謝辞

栄養相談に参加、ご協力いただきました、スポーツセンターの利用者様に心より感謝申し上げます。また、スポーツセンターの職員の方々、共同研究者の先生及びゼミ生のご協力により、このような活動ができましたことを心からお礼申し上げます。

9. 添付資料

チラシ、食事診断結果表、体組成分析結果 (InBody)、写真 (身体測定、栄養相談の風景)

地域住民の運動と栄養に関する栄養相談や食事指導の支援活動



本日開催！

参加無料

栄養診断

身体測定、食生活に関する簡単なアドバイスを実施します。

対象者

65歳以上のトレーニング室利用者
65歳未満の方でも参加状況により参加できることもあります。
場所：1階 会議室

日時

午前10：00～12：00（受付 午前9：30～11：30）
午後1：30～3：30（受付 午後1：00～3：00）
参加料無料

申込

トレーニング室利用前に総合受付にて
「参加希望」とスタッフにお伝えください。

注意点

※駐車場利用の方はお時間に気を付けてください。
※参加された皆様の個人データは、厳重に管理するとともにお名前等は一切公表いたしません。
※変更、開催中止とする場合がありますのでご了承ください。

浅生スポーツセンター 担当：波多優
西南女学院大学栄養学科 担当：山田

食事診断結果表

診断日
2017/08/23

性別	年齢	身長	体重	標準体重	BMI	標準
男性	70歳	165cm	64kg	59.9kg	23.5	標準

ヘルシースコア

65 (100点)

コメント

あなたの食事では素晴らしいところは、
適量になりやすい脂質をとり過ぎではないことです。
糖質のとり過ぎは肥満や生活習慣病、動脈硬化等を誘発します。
肉類や魚ものに偏らない今のヘルシーな食事を続けましょう！

栄養バランス

エネルギー 1643 kcal
基準：2800±100kcal

タンパク質 52.7g
基準：55g未満

脂質 65.1g
基準：65g未満

糖質 223.0g
基準：220g未満

食物繊維 18.2g
基準：18g未満

気になる栄養素は！

ビタミンA

緑黄色野菜やレバー、ウナギを食卓に！
不足は免疫力の低下や眼のトラブル等の原因になります。野菜に含まれるビタミンAはがん抑制作用も注目されているのでしっかりととりましょう。

食事バランス

野菜料理等は調理法で食べやすい工夫を！
穀類は食物繊維・ビタミン・ミネラル源なので積極的に食べましょう。ただし生野菜などたくさん食べる事は難しいです。煮たり炒めたり調理方法を工夫して食べやすく、血数を増やしましょう。また調味料の塩分、油分は控えめに。

274 kcal

1食分（約10分）

InBody

ID: 00008 身長: 165cm 体重: 70kg 性別: 男性 測定日時: 2017.12.25 10:24

体組成分析

脂肪質量 (kg) 25.1 (30.9-52.8)
タンパク質量 (kg) 6.1 (1.7-6.7)
水分質量 (kg) 2.20 (2.47-4.01)
体脂肪率 (%) 12.0 (10.9-41.9)
体脂肪率 (kg) 43.5 (41.9-40.1)

筋肉量

筋肉量 (kg) 44.9 (44.9-40.1)
筋肉量 (kg) 44.9 (44.9-40.1)
筋肉量 (kg) 44.9 (44.9-40.1)

骨密度

骨密度 (g/cm²) 1.02 (1.02-1.02)
骨密度 (g/cm²) 1.02 (1.02-1.02)
骨密度 (g/cm²) 1.02 (1.02-1.02)

体組成内蔵

体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)
体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)
体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)

体組成内蔵

体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)
体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)
体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)

InBody診断

71 (100点)

体組成分析 (kg) 25.1 (30.9-52.8)
タンパク質量 (kg) 6.1 (1.7-6.7)
水分質量 (kg) 2.20 (2.47-4.01)
体脂肪率 (%) 12.0 (10.9-41.9)
体脂肪率 (kg) 43.5 (41.9-40.1)

筋肉量

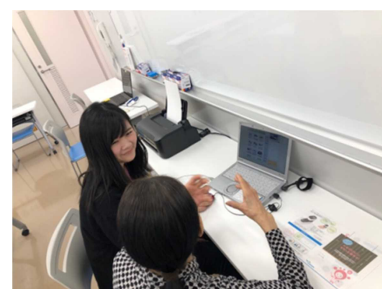
筋肉量 (kg) 44.9 (44.9-40.1)
筋肉量 (kg) 44.9 (44.9-40.1)
筋肉量 (kg) 44.9 (44.9-40.1)

骨密度

骨密度 (g/cm²) 1.02 (1.02-1.02)
骨密度 (g/cm²) 1.02 (1.02-1.02)
骨密度 (g/cm²) 1.02 (1.02-1.02)

体組成内蔵

体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)
体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)
体組成内蔵 (kg) 1.22 (1.22-1.22)



地域貢献活動報告書

企画名：乳がん検診・自己検診法の啓発活動

代表者：吉原悦子（保健福祉学部 看護学科）

【概要】

① 背景

近年、乳がんは増加傾向であるにもかかわらず、「面倒だから」、「時間が取れない」という理由で検診の受診率は低いのが現状である。そこで、昨年は子育て中の母親に対し、乳がんに関する知識と自己検診法の周知を行うことは重要と考え、啓発活動を行った。しかし、現在、60歳を過ぎても乳がん罹患する可能性はあり、広く乳がんに関する知識と自己検診の周知を行う必要があると考え、対象を広げ実践した。

② 対象者

井堀市民センター周辺の地域住民で啓発活動への参加の意志がある者。

③ 活動の目的

活動の目的は、乳がんに関する知識を持ってもらい、健康への意識を高めること。また、ひとりでも、自己検診を行い、乳がん検診に関心を持ち、乳がんの早期発見につなげることである。

【実践内容】

参加学生の募集：学内の掲示板に活動について掲示し、募集を行った。また、教員から学生に声をかけ、参加者を募った。

事前学習会①

2018年9月29日 15:00-16:00

本学教員より「健康教育について」のテーマで学習会を行った。成人の教育理論やセルフケア理論を学び、そこから健康教育企画についてのステップを復習した。さらに、2日間の準備期間を設け、どのような媒体を使用し、どのような内容を伝えるのかを検討した。また、学生同士で役割分担を行った。

事前学習会②

2018年8月29日 16:30-18:00

乳がん看護の認定看護師より「乳がん検診と乳がん検診」のテーマで乳がん検診さらに自己検診について講義を受け、乳房モデルを使用し、実際にセルフチェックの演習を行った。

当日の活動内容

日時：2018年9月10日（月）13:00-14:00

場所：井堀市民センター多目的ホール

参加者：地域住民、市民センターの職員、本学職員等 17名

学生参加者：看護学科3年生1名、4年生6名

企画内容：30分の講演（助産別科教員）「女性の身体のこと～気になることはありませんか～」のテーマで行った。その後、ブースに分かれて15分程度の乳がん自己検診の体験を行った。乳がんの自己検診モデルを使用し、参加者に乳がんモデルを実際に触診してもらう「乳が

んモデル触診」ブースと触診の方法、頻度など自己検診法について説明を行う「自己触診方法を学ぶ」ブースに別れ、学生がそれぞれを担当した。その後、15分の質疑応答の時間を設け、終了後には講演会についてのアンケートの記載を依頼する。

インシデント：特記事項なし

【実践内容】

アウトカム評価

参加者 17 名中アンケート回収は 15 名であった。参加者のうち、乳がん検診を受けたことがある者は 75%おり、非常に高率であった。また、講座を受けて、今後がん検診を受けようと思うかと問うたところ、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した参加者は 90%を超えており、自己触診を実施しようと思うかについては、「非常にそう思う」「そう思う」の割合は、100%であり、検診や自己触診の重要性は伝わっていると考えられる。自由回答では、「モデルを触って確認したりセルフチェックをしてとても分かりやすかった。」、「セルフチェックをする必要性を感じた。」、「学生さんが親身に話を聞いてくれた。」など肯定的な評価であった。

また、学生においても参加のきっかけは、「教員に勧められて」という学生がほとんどであった。しかし、どんな学びがあったについては、多くのことを得られていた。まず、事前学習を通しては、「予防のために医療従事者ができること」や「健康教育は単に知識を提供するだけでなく行動変容を促すきっかけづくり」ということを学んでいた。当日は、実践をすることで「自己検診を生活の中に取り入れやすいように説明することが難しかった」、「検診の重要性を改めて考えた」、「参加者の方が耳を傾けてくださった」、「乳房の触り方を伝えていたら、教員が参加者に触り方がとても上手ですねと付け加えていた。参加者はうれしそうだったので、どう声をかけるのかとても大事だと思った」と実際に参加者と関わることで自分の実践から学びを得ていた。

プロセス評価

本活動は 2 年目であるが、昨年度と対象が違っている。乳がんの検診や自己触診は継続することが大切であり、まだまだ、定着しているとは言い難い。この 2 年間は、単発の活動であり、学生ももっとこうすればよかったと思いながらも次の機会はないため、学生が行動修正し、実践できる場を提供する必要がある。

また、現在は、実践する学生を講義も実習も終了した 4 年生を対象としているが、今回は 3 年生が 1 名参加している。3 年生が地域で生活する人々に関わることは、これから実習に臨むうえで有意義なものになったと考え、参加学生の幅を広げ、学年間でのサポートも考慮していく必要があると思われる。

企画の妥当性と今後の課題

20代から高齢者まで幅広く啓発していく必要があり、今後も対象や場所を広げ継続していく。

決算

共同研究費「地方中規模私立大学における地域貢献活動のプロジェクトマネジメントの研究」（代表：谷川弘治）にて実施。



「自己触診方法を学ぶ」



「乳がんモデルを触診」

地域貢献活動のキャッチコピー&キャラクターについて

2017年4月に学生及び教職員を対象にキャッチコピーとイメージキャラクターの募集を行い、最優秀賞には学生からの応募作品が選ばれました。

キャッチコピー 「とどけ！ぬくもり 要（かなめ）から」

『西南女学院は「西女」すなわち「要」となる。神のみこころを「かなめ」とすればするほど西南の魂が生きてくる。（第7代院長 W.M.ギャロット）』私たちは、この言葉を大切に受け継いでいます。キャッチコピーには、人としてのぬくもりを地域の方々のところに届けたい、本学の学びを自身の「要」とし、地域貢献の「要」となる、このような学生たちの思いが込められています。

イメージキャラクター 要（かなめ）ちゃん

羊と天使はキリスト教、洋服の糸の模様は人々を繋ぐという意味を込め、地域貢献や福祉学科を表しています。エプロンは栄養学科と保育科、背中の羽は、白衣の天使を表す看護学科と世界に羽ばたく英語学科と観光文化学科を表現しています。

2018年10月には、大学公式キャラクターとなりました。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。



地域貢献活動報告書

1. 企画名 北九州市クルーズおもてなしイベント
2. 主催者名 西南女学院大学人文学部観光文化学科
3. 企画代表者 西南女学院大学人文学部観光文化学科 劉明
4. 概要

(1) 活動の経緯と目的

西南女学院大学と北九州市は、包括連携協力に関する協定を 2017 年 9 月に締結したところである。

観光文化学科の劉ゼミ（インバウンド観光）は、九州へのインバウンド促進に力を入れている。劉ゼミと市の連携で、門司・西海岸での外国クルーズ船寄港時における学生を活用したおもてなしイベントを実施する。

イベントでは観光マップ配布、チェキ撮影、消しゴム印鑑作り、書道体験、着物体験などの活動を通して、外国人に日本の文化を知ってもらうことで、感じた良さを自国で広めてもらい、多くの人に日本に興味を持ってもらうこと、北九州市を訪れる外国人観光客が増えること、また、外国人と直にコミュニケーションをとることで、学生の外国語でのコミュニケーション能力を高めることを目的とする。

(2) 実施日時・場所・参加者数・活動内容

実施日	時間	場所	活動内容	参加者数
2018 年 4 月 21 日	8 : 00～17 : 00	門司 西海岸	観光マップ配布 書道体験、消し ゴム印鑑作り、 着物体験	教員 1 人 学生 14 人
2018 年 6 月 4 日	8 : 30～16 : 30	門司 西海岸	観光マップ配布 書道体験、着物 体験、輪投げ、 折り紙、けん玉	学生 6 人
2018 年 6 月 11 日	10 : 30～17 : 30	門司 西海岸	観光マップ配布 チェキ撮影	学生 7 人

5. 評価

○学生参加者の感想

学校内だけでは、外国語でコミュニケーションをとることができる機会は限られている。そんな中で本場の外国語に触れるだけでなく、色々な方々と協力することの大切さや、中途半端なことはできないという社会に出る責任を感じることができたクルーズおもてなしイベントは、本当に有意義なものであったと思う。

○市担当者の評価

市役所、民間サイド両方から、クルーや観光客に対して、北九州に良い印象を持ってもらうことができた。

○メディア（TVQ）の評価

西南女学院大学の学生のおもてなしの心遣いは、十分伝わる。

○外国人観光客の感想

港で歓迎してもらえて楽しかったよ。また、来たい。

○今後の課題

お客様とコミュニケーションが取れるように簡単な英語が話せるよう各自勉強する必要がある。また、お客様を呼び込んで、イベントの内容を英語で説明できるよう、あらかじめ英語でマニュアルを作って練習する必要がある。お客様に楽しそうと思ってもらえるようなブースの雰囲気作り全員が積極的に英語で呼び込むことが必要である。

6. 活動経費

北九州市クルーズおもてなしイベント助成金：10万円。おもてなしイベント用の道具の購入費用及び交通費1人の所有額（千円）を含める。また、交通費の一部を西南女学院大学会計課に請求した。

7. 謝辞

北九州市クルーズおもてなしイベントにご指導いただいた北九州市港湾空港局クルーズ・交流課の皆様ならびに多大なご協力をいただいた西南女学院大学及び観光文化学科の教職員・学生の皆様に対し、感謝の意を申し上げます。

8. 添付資料

北九州市クルーズおもてなしイベント実施時の様子（写真資料）

北九州市クルーズおもてなしイベント実施時の様子



1. 学生団体名 地域連携室学生スタッフ 広報活動グループ

2. メンバー ○齋藤未結（観光文化4年）

小野南夏・樋口絵梨菜・嶺彩佳・川上舞子・川上優香・小出双葉・児玉祐佳・
佐藤ゆずほ・田原綾乃・濱崎絢衣・福田七香・松崎美知佳・吉田菜乃（以上看護
2年）尾池美思・大坪由依・姫野桜（以上看護1年）（○印は報告書作成者）

3. 概要

(ア) 活動目的

地域連携室の活動を大学祭に参加する地域の方々に広報する。

「地域連携活動」と初めて聞いた際、個人的なイメージとして、堅い印象をもったため、大学祭に端を運ぶお客さんも同様ではないかと考えた。どうしたら、足を運んでもらえ、尚且つ、覚えてもらえるのか。そう考えた時、他大学の文化祭の射的がとても楽しかった事を思い出した。

道具があれば何度でも遊べる点は、無料との相性も良く、弾数はこちらで決められる。そこに活動をクイズとして盛り込めば、楽しく、意欲的に覚えてもらえるのではと考え、射的を採用した。

(イ) 実施内容

回	日付	人数	内容
1	7月17日	4	グループ発足。
2	7月27日	4	「チーム学祭」初の顔合わせ。
3	9月6日	10	新メンバー6名加入。 当日のシフト割りを考える。 人手不足の為各々で呼びかけを行う。
4	9月24日	17	新メンバー7名加入。 ボードの割り振りを決めた。
5	10月15日	17	ボードの仮締切日。 実際に机を並べ、当日の配置を決めた。
6	10月17日	17	前日準備の日。 分担して暗幕、機の回収、机並べを行った。 1時間半で終わり、その後は会場の飾りつけをした。
7	10月20日	午前・午後約6名ずつ	大学祭一日目。 昼から広い世代のお客さんに楽しんでいただき、 来場者は137人。
8	10月21日	午前・午後約6名ずつ	大学祭二日目。 お笑いイベントもあり、さらに多くのお客さんが来場した。 来場者は216人で、二日合わせ、403人。 スタッフで片付けを済ませ解散した。

ウ) 事前準備

大まかに、道具の用意、クイズ作り、ボード作り、その他シフト作成、レイアウト決め等に分ける。

準備内容は以下のとおりである。

準備	準備内容
道具の用意	銃はおもちゃの銃を採用した。見た目のカッコいい銃はいい宣伝材料になり、少しコツがある難しさがよりお客さんのハートをつかむと考えた為である。ゲーム要素を本格的にすることで意外さと、珍しさも期待できた。
クイズ作成	クイズの答えはボードや、張り紙にある為、探すほど「部屋全体を見てくれる」、「活動を知りに行ってくれる」流れができるという作戦である。 内容も「要ちゃんはどれ?」、「存在しない活動はどれ?」等の三択で、誰でも「ちょっとやってみるか」と思える難易度に設定した。
ボードの作成	活動紹介の要となるボードは「いかに見てもらえるか」「どれだけ情報を伝えられるか」が勝負だと考え、タイトル、画像、一文だけの「サッと情報が伝わる」ボード、手描き特有の温かさを持った、「思わず見たくなる」ボードを目指した。 簡潔なデザインの為、1人の負担も少なく、活動内容を知るいい機会にもなった。

(ア) 当日の実践

1班約6人構成で、大学祭1日目、2日目の午前・午後の4班に分かれ、運営する。

更に班の中で、①受付1：解答用紙配布・人数チェックを行う。

②受付2：用紙回収を行う。

③射的コーナー担当：弾回収・コップ組み立てを行う。

それ以外に、教室が空くと、ボードやおもちゃの銃を持って外で宣伝を行った。

4. 活動を振り返って

【活動】

- ・何週もまわる子供や、「あ、キャッチコピーはね、“とどけぬくもり要から”だよ!」と、教えてくれる子供もいて「知ってもらおう」目的が達成されていると感じた。
- ・一日目の午前中は空いていて、それが毎年の傾向ということが分かった。
1日目は10:00頃から集まったが、11:00頃でちょうどいいのかもしれない。
- ・「何週もまわる子供が、景品を貰いつくしてしまったらどうするか」と危惧していたが、実際はそこまで問題にならなかった。
景品を立派にしすぎず、飴にした事で良い防止策になったのでは。

- ・ 宣伝活動では、大きな銃はよく目立ち、お客さん、特に子供が興味を持ち、そのまま集客に繋がる事が多かった。

【感 想】

1つの企画をやり遂げるまでに、多くの人の協力がある事を改めて感じた。

スタッフは、実習で忙しい中、会場レイアウトのアドバイスや、かわいい紹介ボードを作り、当日も臨機応変に対応していた。また、浅野先生は銃や景品の用意等様々な点でお世話になり、結果、予想以上のたくさんのお客さんに来てもらえた。

これは、それらの協力なしには成しえなかったと思う。人に協力を仰ぐことの大切さを感じた体験だった。



1. 活動名：地域連携室学生スタッフ グッズ作製グループ

2. 学生団体名：めろんぱん

3. メンバー：

看護学科2年 ○福田遥、○田原春花、檜崎千夏、森中菜々子、中山幸恵

観光文化学科2年 緒方菜月、川崎瑛南、山本明歩

(○印は報告書作成者)

4. 概要

(1) 活動目的

西南女学院大学のキャラクターである「要ちゃん」のグッズの制作と、地域連携室がどのような活動を行っているのかを知らせる広報活動を行った。

(2) 実施内容

1) 事前準備

私たちは2018年10月20日(土)・21日(日)に開催されたしおん祭での活動を最終目標として、事前に7回集まり準備を進めてきた。具体的な内容は以下の通りである。

回	日付	人数	内容
1	6月21日	8	顔合わせ。活動内容の説明。グッズ制作の意見交換
2	7月12日	5	シオン祭での活動を決定。 グッズ制作の具体的アイディア出し。 ・学校案内板制作 ・シオン祭でのティッシュ配布 ・要ちゃんTシャツを制作
3	7月19日	3	話し合い。 ・ティッシュの配布数や配布日時について ・Tシャツ作成の最終的決定
4	8月29日	5	Tシャツデザイン作成 ティッシュに入れる広告の下書き
5	9月6日	4	Tシャツデザイン修正 ティッシュに入れる広告の清書
6	10月6日	8	シオン祭当日の打ち合わせ
7	10月17日	8	シオン祭で行う地域連携室のPR練習 ティッシュ配布場所確認 最終打ち合わせ

以上のように、学校の課題や実習、夏休みは地元へ帰省したりと、学科が違うメンバーだったためなかなか全員が集まることはできなかったが、お互いに連絡を取り合ったり、先生方の助けを借りながらしおん祭当日まで活動を進めることができた。

2) 当日の実践 10月21日(しおん祭2日目)

①地域連携室の活動のPRを行う。

当日はPRの本番前に最終リハーサルを行い、又本番では野外ステージ上で地域連携室の活動内容や要ちゃんについての紹介をし、西南女学院の学生だけでなく、多くの地域の方々に私たちの活動を伝えることが出来た。

②ティッシュ配布

3つのグループに分かれ各自の持ち場で3回に時間を分け配布。ティッシュ配布は全員が初めての体験だったが、時間がたつにつれて多くの方に声をかけることができ、ティッシュを配布することによって私たちの活動を知ってもらうことができた。学生8名は約4か月かけて準備してきたものを形にすることができ、達成感を味わえた。

5. 活動を振り返って

私たちはグッズ作り活動グループを振り返るためのアンケートを実施し、全員からの意見を集約した。

(1) グッズ作り活動グループに参加した動機は何ですか。

- ・楽しそうだった。
- ・グッズを1から作る体験をしたかった。
- ・企画系に関わりたかった。
- ・学校の行事や地域の行事に参加したかった。
- ・他学科との学生と関わってみたかった。
- ・就職活動に役立つため。

といったさまざまな理由が挙げられた。

(2) 活動を通して、得たもの、難しかったもの、楽しかったことは何ですか。

- ・グッズを作るという点では、値段やデザインなどの考慮をしなくてはいけなため学生の力だけで行うことは難しく、スタッフの方が色々してくださって完成できたと思う。
- ・自分たちだけの力で行うのは難しかった。
- ・生徒たちが率先して何かを生み出すということができなかったと思う。
- ・学科で行事や授業の有無が異なったのでみんなで集まれる回数が少なかったことが今回生徒が率先して行えなかったことと関係してくる。
- ・Tシャツのデザインや要ちゃんをみんなに知ってもらうための方法を考えるのが難しい。
- ・制限がある中でグッズを作ることは難しくもあったが、その分達成感が得られた。
- ・ティッシュを配る際にどのようにしたら上手く渡すことができるかという点では、初めて会った人に好印象を持ってもらうには笑顔で目を見て話すことが大切だと改めて気づくことができた。
- ・ティッシュ配りは初めての体験で、緊張してティッシュを渡すのが難しかったが、積極的に配ってみるとみんな優しく受け取ってくれたので楽しむことができた。

という意見が上がった。

(3) 活動に参加して、自分自身が何か変化したことはありますか。

- ・人見知りがあったけれどティッシュ配りを行い積極的に人に話しかけることができるようになったと感じる。Tシャツ作りでは主体的に活動を行えることができるようになった。
- ・自分たちの発言がみんなの力で実現できたことで、みんなで何かを行うということが得意ではなかったけれど、チームで何かを達成することは良いことだと思えるようになった。
- ・最後まで物事をやり通す力がついた。
- ・今まで関わったことのない人と関わることができ、今後時間がある時に地域連携以外にも何か他人と関わられるような場所に自ら行動して経験を積んでいきたいという気持ちになった。
- ・活動に参加して、貢献できたかどうかはわからないが、自分だけでなく、みんなに得られるものがたくさんありこれが達成感に繋がるのだと思った。これからも積極的に地域貢献活動のような活動に参加し

ていこうと思った。

- ・少しだけ積極的になれた気がした。
- ・もっとイベントに挑戦してみたいと考えるようになった。
- ・話しかけることが苦手なのでティッシュ配りはかなり苦痛だったが、結果的に自分が配った数の人数の人が要ちゃんのことを知ってくれているのだなと思えて前向きに反省できた。

などの意見が出た。

メンバー全員が活動を通して自分の中で何か変化したことがあり、それが前向きな変化であったことが今回の活動の中で最も良かった点だと考える。

（４）今後に活かせるものはありましたか。

- ・改めてコミュニケーションで何が大切なのかを学ぶことができたので、今後看護師になって患者さんとのコミュニケーションをとる際に生かしていけると感じた。
- ・今回みたいに、意見を聞いたり連絡を取り合ったりして、グループワークとか何人かで同じことをするときに、全員で達成できるようにしたい。
- ・最後まで物事をやり通すことが今後の実習などで役立ってくると思う
- ・伝えたいことをわかりやすく伝える力（Tシャツのデザインより）、コミュニケーション力を活かしていきたい。
- ・子供とお年寄りの方には同じ説明をしても分かりにくいので、わかりやすく説明しなければならないことに変わりないが、歳に合わせた説明の仕方をする必要があり、看護でも同じだと思ったので活かしたい。
- ・臨機応変に対応できるよう予測して行動する。
- ・ゼミ活動などに向けて心の基礎固めを地域連携室の活動を通して行っていきたい。
- ・自分だけでなく最終的に全体を見て反省することができるようになったので活かしたい。

と、いったさまざまな意見が出た。今回の活動を通してみんなが活動を終えた時に自分の今後に活かせることを考えてきちんと生かそうとしていて良い活動になったと思う。



【打ち合せの様子】



【PR 練習の様子1】

↑ 広報用ポケット
ティッシュ



← 【PR 練習
の様子】

【大学祭ステージ
での PR 活動】 →



1. クリスマス礼拝ボランティア活動

(1) 参加者名：看護学科2年 小野南夏、川上舞子、楠晴捺、小島千夏、濱崎絢衣、
原菜奈子、横手沙帆

(2) 活動内容

来賓や学外からの参加者の誘導、献金活動、物品販売での要（かなめ）ちゃんファイルの配布

2. クリスマスツリーマップボランティア活動

(1) 参加者：看護学科2年 三戸田愛美、嶺彩佳、樋口絵梨奈、川口愛結実、小野南夏、
佐藤ゆずほ、田原綾乃、藤村佳歩、松崎美知佳、森中菜々子、中山幸恵
看護学科1年 塩塚貴子、小金澤彩海、鬼頭志歩、神原叶果

(2) 活動内容

- 1) 12月に各部署に飾られるクリスマスツリーマップを作製すること。
- 2) クイズラリーの企画、実施（各部署のツリーにクリスマスに関するクイズを貼付し、クイズラリーを実施する。）

3. 活動をふり返って

(1) 参加した動機について。

- ・元々ボランティアに興味があり、ちょうど今回のお話を聞いたから。
- ・前々から何かボランティア活動してみたいと思っており、中々機会が合わなかった中、今回タイミングがあったため、参加しようと思いました。また、年に一度のクリスマス礼拝であり、去年自分が見た礼拝がとても印象に残っていたため、何か関わりたいと思い、参加しようと思いました。
- ・学内での活動に参加してみたいと思い、ちょうど良い機会があったので、参加することにしました。また、学部的にボランティアとして動ける時期が少なく、できる体験・経験はできる限りしていきたいと思い参加しました。
- ・自分はサークルに所属していないため、何か他の学科、学年、教職員との繋がりを持てるようになりたいと思っていました。また、授業とアルバイトだけでなく、大学生だからこそできる活動に自分も携わってみたいと思い、参加しました。

(2) 活動を通して、得たもの、難しかったこと、楽しかったことについて。

- ・多くの一般の方や先生方と関わり、同時に案内を行うことが初めてだったので最初は少し戸惑ったこともありましたが、案内係の重要性を感じました。
- ・他の学科の人たちと普段交流することはないので、今回の活動を通して交流することができ、楽しかったです。
- ・バザーで、多くの人が押し寄せる中ファイルを渡す時、一般の方もいらっしゃるためできるだけ丁寧な対応を心がけていましたが、ファイルを渡す人数が少ないこともあり、あたふたしてしまったと思います。もう少し人がいたらもっと丁寧な対応が出来たのかなと思いました。しかし、バザーで購入して下さる方々が多くいて、募金に繋がっていると思うととても素晴らしい活動だと思いました。
- ・今回私はクリスマス募金を呼びかけ、募金をして下さった方にティッシュを配るという活動を行いました。最初は声掛けを行っても素通りされることが多くありました。しかし、声掛けを続けたり、財布を手を持っている人に声掛けするなど工夫すると、思ったより集まって嬉しかったです。
- ・献金係でしたが、どのような声かけをすれば献金してもらえるか、どのように声をかけるか、を工

夫しながら行えました。

- ・私は前半に案内係、後半に募金活動をしました。活動を通して、募金活動に参加してくださる方々がいらっしゃり、その善意を受けとる窓口になるという体験をすることができました。笑顔で接する姿勢に答えてもらえたことや自分の役割が全うできることに対して楽しく感じ、慣れない活動に適応し、積極性を持って主体的に動くことが難しかったように感じました。
- ・案内が必要な方かどうかの判断すること。相手が気分を害さないように、声掛けをすること。声の大きさや声をかけるタイミングが難しかったこと。知っている方から「頑張ってるね！」と声をかけてもらえたこと。
- ・いろいろな学生と連携して作業を進めていくうえで、活動への理解が十分に得られなかったり連絡がうまくいかなかったりしたことが難しいと感じました。けれども、作業をするうえで多くの人と関わることで新しいアイデアや視点を得たりすることで刺激を受けることができ活動が成功した時には皆で喜び合えたことが嬉しかったです。

(3) 活動に参加して、自分自身が何か変化したことは。

- ・普段、知らない人とコミュニケーションをとる事が苦手だったけれど、今回の活動を通して、様々な世代の方々と関わり、コミュニケーションを取ったことで色々なお話を聞くことが出来、もっと積極的にコミュニケーションを取っていこうと思いました。
- ・今までは積極的にボランティアに参加することがなかったので、今回を機会にもっと色々なボランティアに参加しようと思いました。
- ・自分が笑顔で対応すると、相手も笑顔になって下さり、とても清々しい気持ちになりました。ボランティア活動はとてもいいものだと思えました。
- ・ボランティアすることで終わった後に達成感がもてるようになりました。もっと色々なボランティアに参加したいと思いました。
- ・大きな声で積極的に声をかけたりすることが苦手でしたが、時間が経つうちに慣れてきて、ボランティアとして少しは貢献できたのかな、と思いました。
- ・慣れないことでも徐々に適応することができると気づくことができ、自分の積極的な行動に対する姿勢が変化したと思います。
- ・最初は恥ずかしかったため、なかなか大きな声を出して献金をお願いすることができなかったが、徐々に慣れたことで、たくさんの方に声掛けをすることができ、恥ずかしがらずに勇気をもって行動することは大切だと改めて感じた。今後は気持ちを忘れずに活動したいと思う。
- ・違う学年の方や教職員の方々と交流する機会をたくさん持つことができたので年上の方とのコミュニケーションのとり方について再考、改善したり、メンバーと協力し合いながら活動に取り組むことの重要性について理解し周りの人への気遣いや人の立場や視点にたって物事を考えられるようになりました。

(4) ボランティア活動に参加して、今後活かせるものは。

- ・今回の活動を通して、様々な場面で臨機応変に対応することの重要性、そしてコミュニケーションの重要性を改めて感じました。これから看護専門職に関わっていく際にこの経験を生かしていこうと思います。
- ・あいさつを忘れずに、笑顔で接することが大切だと思いました。
- ・今回、相手に対する対応や表情の大切さが分かりました。今後、実習や働きだした時にも活かして

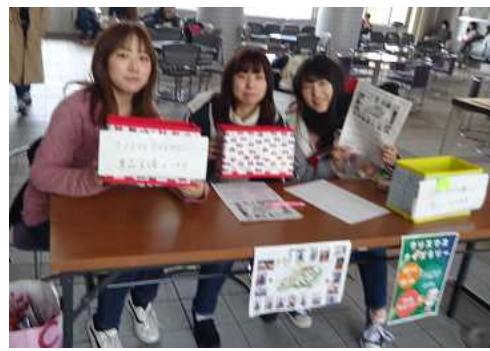
いけるのではないかなと思います。

- ・ボランティアをしようと思っても実際に行動しないと意味がなく、行動することの必要性をより感じました。
- ・積極的に行動することで、自分を今よりもっと活動的にさせることができそうだと思います。
- ・上記にもありますが、積極的に物事に取り組む姿勢や、またメンバーと協力して行うチームワーク力を今後に活かしていきたいと考えています。
- ・案内係の時の反省と献金の声掛けを行っていた時に感じた気持ちを忘れず、今後の活動に活かしていきたいと思う。
- ・今回のボランティアでは様々な人と協力しながら、1つの目標に向かって作業を進めていきました。その中で人との関わり方や物事への取り組み方、作業の進め方について改めて考えさせられる部分が多々ありました。授業でもグループで作業をすることや1人で計画して行わなければならないことなど多々あるので、今回の活動を活かしていきたいと思います。

【クリスマス礼拝ボランティア活動の様子】



【クリスマスツリーマップクイズラリーの様子】



クリスマスツリー-MAP 2018

① 正門

② マロリーホール前

③ 図書館

④ 教務課(7号館2階)

⑤ 入試課&教務課(8号館1階)

⑥ 5号館1階 ホール

⑦ Switch(5号館3階)

⑧ 学生総合支援室(6号館1階)

⑨ 短期大学部準備室(2号館3階)

⑩ 施設課横掲示板(1号館2階)

⑪ 人文学部教育支援室(8号館2階)

⑫ WEST(2号館1階)

⑬ 保健室

⑭ 人事給与課前

⑮ 地域連携室

⑯ 西商文学院中学校・高等学校正門



クリスマスマップ クイズラリー チラシ

あの頃 ボクは 北九州男児

こんにちは。わたせせいぞうです。

ボクが中学、高校の時、この西南女学院というのはまさに憧れの花園でした。その花園に、この歳になって立つというこの感激はなかなか、心の中でドキドキしております。このドキドキすることが、ひょっとしたら青春じゃないかなと思います。

ボクは、実は神戸で生まれて、そして臍の緒が乾かないうちに父の実家である北九州 小倉に移ってまいりました。そして18年間この地で育ちました。それから、ずーっと東京に住んでおります。ボクの描くコミックとかイラストは、その多感なボクを育ててくれた北九州。海ですね、玄界灘。そして、北九州の町々。そして、北九州の人々。それがボクの作品の原点だと思います。



ハートカクテル 35 周年・カレンダー30 周年の年に

いろんなコミックを描き続けて、石丸さんの紹介ありましたように、まさに長い長い旅を続けております。たまたまその旅の途中の駅、それが今年。実は『ハートカクテル』という最初に世に出たコミックの生誕 35 周年になり、カレンダー30 周年の年であります。ですから、そういう年のその駅に、今、降り立ってるわけです。今年、そういう記念月に合わせまして、作品展が行われました。

その前に、ボクの『ハートカクテル』というのを、ここでもう一度再現したいと思います。これが最初に世に出た単行本の第1巻です。実はこの時、編集者と空を青くするか、夜の空にするか、それとも夕焼けのような赤い強烈な色にするかということ、ものすごくもめました。で、最終的に、目を引く赤い情熱がいいだろうということでオレンジ色の表紙になりました。ボクの『ハートカクテル』というのは、その当時は珍しくて4ページの短編、ショートストーリーでオールカラーでした。その1編を紹介いたします。これは『思い出ワンクッション』という作品の1つですね。別れた彼と彼女が会おう、再び出会った時のお話なんです。ちょっと読みます。これは女性でお願いいたします。

石丸：「もし、もし仮に別れたならば。」

わたせ：「別れちゃった後。」

石丸：「別れちゃった後、街で出会ったらどうする？」

わたせ：ホットな時の彼女の軽いジョークだった。

「もちろん知らない顔ですれ違うだけさ。君は？」

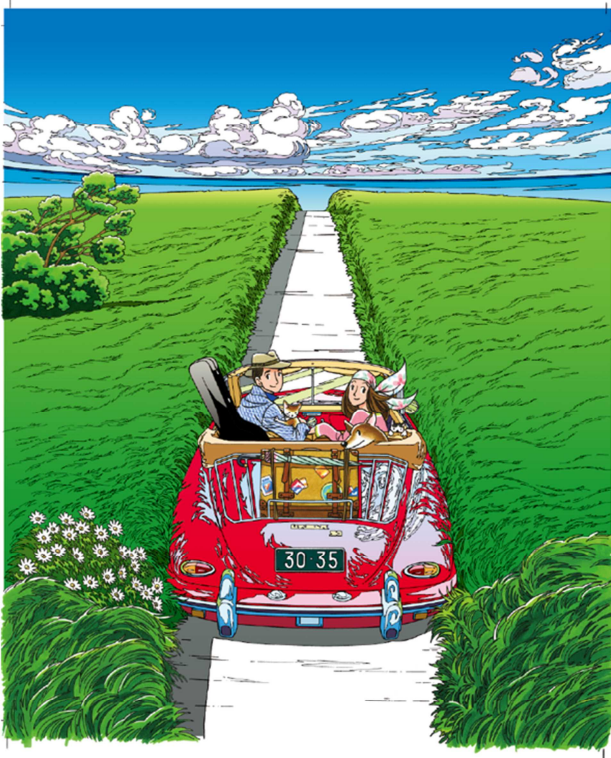
石丸：「そうね。じゃあ私もそうするわ。」

わたせ：別れた後、それがお互いの重い約束のようにになっていた。そしてある日、ボクたちは出会った。彼女はそのレストランの日当たりのいいコーナーに。ボクは店の奥。彼女はボクに気付いてるはずなのに、こちらを一瞥することもなく、新しい彼との話に夢中だった。久しぶりの彼女はまぶしいほどに美しくなっていた。ボクは辞書を片手に英字新聞を読んでいた。

ところが。ところが、先ほどから同じセンテンスばかり。左指は辞書の同じページをくっていた。でも、とにかく英文に神経を集中させなければ。Launch、乗り出す、始める、乗り出す、始める。そうしなければボクの指が勝手に思い出のアルバムを開きそうだったから。

彼女たちが席を立つ気配がした。「ちょっと精算してくるよ。」彼女が席に残されて、彼女はコンパクトを取り出して、メイク。ボクは1つだけ思い出した。彼女にハート型のコンパクトをプレゼントしたことを。あの時のハート型のコンパクトだろうか。「やれやれ、そんなこと、どうでもいいじゃないか」と、もう1人のボクが肩を叩いて言った。ボクは全てをシャットアウトして新聞を広げた。春の日差しがコンパクトにワンクッションして、ボクの新聞を照らした。「やれやれ。」ハート型の光の中で、ボクは、彼女がいたずら好きだったこと思い出した。

『思い出ワンクッション』という1つのお話です。



©SEIZO WATASE/APPLE FARM INC.

80年代が注目されてるということで、小学館の編集部から『ハートカクテル』からもう一つ大人になったお話を作ってくださいということで、『ワンダーカクテル』というのを作りました。小学館の『MEN'S Precious』とビックコミックの『BROS.NET』で、8ページのオールカラーのお話を描いています。これがその1つ、その中の1話のタイトルでございます。

カレンダーも30周年で、これが今年のカレンダーの表紙です。こういう車に彼女とボクが楽しそうに乗っております。次にお見せするのが、実は来年のカレンダーです。これは7月、8月で、実際にボクはこういう南の島に行って、ここの船、ボクじゃないですよ、ボクの奥さんじゃないですけども、こういう船のシーンがあつて海亀がさつとよぎったのを覚えて、それを描いたわけです。こういうカレンダーを描いております。

この記念の年に、まず石巻から作品展をスタートさせました。これが石巻のポスターです。今年の4月21日から7月1日まで。まず被災地の石巻から。実は石巻にボクの友人の実家がありました。彼は今札幌に住んでるんですけど、当時彼に電話して「お家大丈夫かい？」彼は「1階に津波が押し寄せて1階は駄目になった。なんと庭の灯籠が動いた」と。それぐらい津波が激しいんだということを知りました。

仙台も被害がたくさんあったんですけども、その仙台の藤崎というデパートですが、そこで作品展を2度ほどやりましたので、藤崎の方にボクから電話して「何か必要なものはありますか」と言

うと、「乾電池が欲しい。乾電池の単 1、単 2、単 3 をできる限り集めて送ってくれないか」というふう。「そんなんお安い御用ですよ」って引き受けたんですけども、不思議なことに、その時東京の街には乾電池がなかったんです。なぜなんでしょう。いまだ不思議なんですけど。ボクは大阪、福岡、北九州の友達に言って、乾電池をかき集めて、そして藤崎へ送りました。藤崎の女性の店員が、その乾電池を握り締めて - 女性の家は流されたそうです - その乾電池 1 つを握り締めて泣いてたという報告を受けた時に、これはとても大きな震災だなと思いました。

これは仙台の日和山公園です。ここに災害の時多くの人が逃げて、助かった。これは海に続く川ですけども、丸いドームみたいなものがあります。それが石ノ森章太郎さんの石ノ森萬画館です。そこで作品展をやりました。このドームでも、やはり震災に遭ったそうです。この上に行った方は助かったんですけども、一番石巻が被災者を多く出して、一番多く家が流されたと聞いております。これはその時の世界展の中ですね。この時の作品展の原画が 90 枚弱でした。

この作品展の後に、博多大丸でのパサージュ広場を背景にしてポスターを 1 枚描きました。それがこのポスターです。本日博多大丸の高田さんがおいでになっておりますけども、高田さんはボクの『ハートカクテル』の本当にファンだということで、ボクよりも作品については詳しくて、高田さんの思い出もあって 80 年代を再現した男女の絵になっております。これと同時に、毎日新聞出版社のから『あの頃ボクらは若かった』という単行本が出ました。この原画を含めて 130 弱の原画が並び、壮観な作品展の会場になりました。博多大丸 8 階が全部 80 年代になりました。

博多大丸は 9 月 5 日から 2 週間ほど。これと前後して 9 月 8 日から東京の幕張のディズニースペースにイクスピアリというのがあるんですけども、そこにオリーブの木をちょうど移植してきて、それを中心にポスター作ってくださいとお話がありまして、これを描きました。実はオリーブの中に、幸せのオリーブの木ですから、オリーブの中に 7 羽の鳥と 7 つのハートが隠れております。そういうような隠し絵的なものを入れて、この作品を作りました。

今ちょうど、東京の恵比寿の代官山蔦屋という本屋さんで小さな規模の企画展ですけども、「クラシックカーの風に乗って」というタイトルでやっております。代官山蔦屋書店では毎年この時期にクラシックカーのイベントがあるそうで、クラシックカーをベースに書きました。

11 月 29 日から 12 月 30 日まで、パリの La Villette っていう博物館でジャポニズム展が開かれておりまして。その中でボクが『東京エデン』っていうのを描いておりまして。都市と主人公が合体した作品の中で、この『東京エデン』っていうのが選ばれて。その 1 つのイラストレーションです。これは東京の港です。来年は新国立美術館でその帰国展があります。

ボクはこういうイラストレーションを描く時に、一番大切にしていることがあります。ストーリーのあるイラストを描こうということを信念に持って描いています。コミックを描いてるせいか、1 枚のイラストレーションにも必ずストーリーを込めております。

次にお見せするのが、京都の町屋に住んでる女性を描いてます、和服の。今日も和服の方がお見えですけども、ちょうど初夏なんです。京都の町屋。京都の建物っていうのは、陰影礼賛とか、明るいところと暗い所がものすごくコントラストがはっきりしてるんですね。ちょうど初夏とありますように、庭にはピンク色の紫陽花そしてお軸にはブルーの紫陽花と。そしてこの作品の中で女性が、男性用のパナマ帽を膝の上に置いて、座布団の上に座ってる。で、あるストーリーを込めて描いております。見た方が「どう言うんだろう？」って考えてくれるのが、イラスト画を描くボクの 1 つの意義なんです。

「どうしてなんだろう？」と思った瞬間に、見てる方はこの世界に入ってるんです。「どうしてこんなとこに？」 実は、彼女は西に住んでる女性、そして彼は東の男性。遠距離恋愛してるんです。久しぶりに彼がやってきて、一時期過ぎて、そして前の座布団に座って彼としばらく話してる。で、彼はいつもの勝手口の裏木戸からさよならと帰っていく。しかし彼女は忘れていった帽子を膝

の上に乗っけて。やがて彼はまた戻ってきて、風のようにさーっと行って、また風のように戻ってきて、「ごめんごめん。帽子忘れたよ」って。そういうストーリーなんですけど、実は毎回毎回彼は何かを忘れて帰るんです。ある時はネクタイだったり、ある時は万年筆だったり、書類だったり。

「さよなら」と言って風のように去った。でもすぐ戻ってくる。ほんとに別れというのはつらいですけども、一瞬の「また帰ってくるな」という、そういうちょっとした幸せ感の中に、ひとときを過ごした男女の幸せのシーンの中に入ってですね。でも、笑顔で行って、また去って行ったらもつとつらいかもしれませんけどね。「風のように去っていった彼がまた戻ってくるわねえ」と言って待っている。で、タイトルが『風待月』というふうになっている。ストーリーを込めて1つの作品を作りました。

今、週刊誌の表4（編者注 裏表紙のこと）とか、最初の見返しの時に、この絵を飾っております。これはある男性のオードトワレなんですけども、そのイラストレーションです。コマーシャルのイラストレーションです。これにもお話がありますね。彼が外に立って、追い風を一身に受けて、彼女はそれを避けている。これにも4ページのお話があります。ここにQRコードが出ております。それを写メしてみると4ページのちょっといい話が出てきます。

こういう絵を今、描いております。ほんとに長い旅をしております。

ボクの生い立ち

ボクは北九州男児だった。そうだったということで、そのボクの生い立ちをお話ししていきたいと思います。ボクの父親は北九州生まれで、北九州育ちです。北九州の小倉という港町です。母親は、ずっと北の北海道 室蘭という港町で生まれ育った女性です。その2人がちょうど真ん中の神戸で会いました。

父親はもともと絵が好きで、何度も絵で身を立てるというふうに。何度も東京芸大を受けたんですけども、2浪しました。3浪目になるかどうか。3回目の受験に行ったんですね。実は祖父、ボクのおじいさんなんですけども、医者をしておりました。もし3回目で滑ったら医者を継ぐんだよっていう約束の下に送り出したんですよ。ところが父は3回目の、最後の試験も駄目でした。敗れました。おじいちゃんが喜んだ。さあ、これで戻ってくるぞと。

ところがうちの父親は戻る途中の神戸で途中下車したんです。なぜ神戸で途中下車をしたかというところ、ボクの父親がとても尊敬する小磯良平さん。小磯良平さんが神戸にいたからです。それで自分は関西学院大学に行きながら、小磯さんのお宅に何度もお邪魔して、いろんな話をしたそうです。小磯さんといえば『奔唱』という、有名な、これ多分ミッション系の女学院じゃないかと思うんですけども、有名な絵がごさいますね。この小磯さんの所に行って。

大学というのは4年で卒業ですよ。北九州のボクのおじいさんは、それからでも医者は遅くないって待ってたんですけども、父は神戸の倉庫会社に就職して、新入社員として椅子に座りました。その前に誰がいたかというところ、母親がいたんですね。こんな素敵なお話を、年をとってからでも、2人はよく話してくれました。ですから神戸という街で、そんなに楽しい思いをしたのかなと思います。

2人が神戸で結婚してボクが生まれたわけです。その時に父親は倉庫会社を辞めて、いろいろ戦時中のこともありましたので北九州の実家に戻ってきて、父は普通のサラリーマンとして会社に入りました。うちのおじいさんは、息子には果たせなかった夢、ボクを医者にさせたい。一方、父親は、自分に果たせなかった絵描きの夢を息子にさせたい。ということで、ボクはどちらからでも有望視されたんですね。

父親は一足おじいさんよりも早く手を打って。市立小倉幼稚園というのがありました。鍛冶町のところにありまして。市立小倉幼稚園に年長から行って、堺町小学校という所に行きました。堺町小学校は今はないんですね。そこの堺町小学校に行きまして。堺町小学校の1年生と幼稚園の年

長の2年間、父の友人の絵描きさんがボクの家庭教師になりました。

いまだにその教えがボクのずーっと心にあるんですけども。まずですね。最初に1個のリングを置きました。それを「せいぞう君、書いてごらん」。ボクはほんとに絵が好きだったんですね。いろんなパステルだとかクレヨンで、浴槽の白壁に飛行機だとか描いて。そしてラックスというせっけんがありますよね。ラックスという文字をいろんなカラフルな文字で描いてる。なぜかそれはおじいさんも親父も気に入って、なかなか消さなかったですね。そんな状況でボクはその先生に会いました。1個のリングを置いて、写生しますよね、当然。そして先生に「できました」と。そして必ず先生は「良くできたね。でももっと。せいちゃん、見てごらん」。で、次にリングがまた出てくるわけです。これまたリングを見てずーっと描いて。で、終わって、先生に「描きました」。持っていくと、「せいちゃん、良くできたね。でももっとよく見てごらん」。そんなやりとりが何度かありましたね。そうするともう小さい子ですから、飽きちゃったんですね、リングに。もう最後の頃ですか、なんか啓示のように、1個のリングに光が当たってる部分と暗い部分が合ったんです。最後のほうで。それで、白い部分は白いパステルで描いて、そして影の部分は黒で描いて。そうすると初めて先生は「大変良くできました」。で、「次にせいちゃん、どこに行って写生したい?」。到津動物園（現在の到津の森公園）に行ったんです。この辺ですね。今もあるんです。到津動物園に行くと、まずキリンを描きました。キリンを描いた時に、先生はキリンの手前に1本の黒い木があるので、縦の黒い線を描きました。「これは手前にある木だろう」。そうするとキリンが少しだけ錯覚で、遠近で見たんですね。その先生に教わったこの2年間で、まずこれは基本的に一番大切なことなんですけども、クリエイターで大切なもの何っていうと、誰でも最初に挙げるのは観察です。これは何もクリエイターだけじゃないですね。いろんな仕事してたら、あるいは介護をしながら、この人は何を望んでいるか。やっぱり全てのことに観察っていうことは、通じるんじゃないかなと思います。

ボクは小学校の時に、やっぱり絵が上手だったんでしょうね、いろんな所で先生が「1人残って、あなた、絵を描きなさい」って。たった1人ですよ。ボクが残って。こういうことがよくありました。鯉のぼりの絵を描きました。そうすると金賞取ったりして。ほんとに絵が好きだったんですね。で、何度も何度も「描け」と言われました。

今度、突然母親が何を思ったのか、「明治学園に行きなさい」。「いいよ」、「でも受験があるのよ」。で、受験して明治学園に行ったんですけど。これはかわいらしいですよ（笑）。小学校6年の時の面接の時の写真、そして受験票にも貼った写真。いまだに覚えがあるんですよ。似てますかね（笑）。

試験受けに行くと、覚えてることが1つあるんです。国語で、成績という漢字を書きなさい。績という文字がのぎ偏か糸偏で迷った。ところがちゃっかりしてたんですね。受験票の写真の裏になんとかかつにも、学校側が『成績表をご持参の上』と書いてるんですね。それを思い出して、やったと思って。やっぱり神様はいるんだと思いましたね（笑）。そのおかげで明治学園に入りました。明治学園の3年間もやはり、何かというと絵の感性があると、ボクは言われておりました。

そして小倉高校に。小倉高校に入ると、書道部か絵画部か迷う時がありました。2つ選択なんです。その時、普通の流れでいくと絵画にいきますよね。ところがボクはその時ですね、1枚の書を見たんです。これはどんな書かという前衛書道だったんです。ですから1枚の半紙に、バーっと墨で書いて、文字のようなものが書いてある。墨の部分と白い余白があるんですね。それを見た瞬間、「あ、これ絵だな」と思って、絵画に行かなくて書道に行ったんです。

ボクの母親というのはとっても小さい頃から教育ママでね。書道も母親が上手だったんですけどね。書道の大会でも、いつもノミネートされてたんです。ノミネートというか、母親が申し込んだんです。母親は、それはもっと小さい頃ですけど、梅という字を何度も書け。明日は梅という文字を書け。前の晩、梅という字を何度も何度も母親の叱咤で書いたんです。停電になりました。「よし、休める」と思ったら、母親がろうそくを持ち出してきて。ろうそくを2つ立てたら『八つ墓村』な

んですけど、怖い状況ですね。あの時の顔は忘れないですけども。そのように書かされていました。

今度、大学に入りますと、なぜかボクは文章を書きたくなかった。当時はやりの新聞記者に憧れてね。ここに西日本新聞の川崎会長がおられるんですけど、ほんとに新聞記者に憧れたんです。で、新聞社を受ける。大学で学校推薦というのがあったんですね。学校推薦である損害保険会社を推薦されました。その損害保険会社も一次試験を通して、そして二次試験で面接があって終わりなんですけど。ところがその二次面接が遅れたために、新聞社の二次試験の日と重なったんですよ。だけど、また神はいたんですね。午前中に損害保険会社の東京支社の面接。午後から新聞社の二次試験を。これは立教という大学でやりましたね。ずっと面接を待っていると、ボクのなんと3人前で「これから後の人は、お昼にしてください」。これがボクの第1の岐路ですね。残って新聞社を諦め損保に行くか。思い切って夢を実現するために、損害保険会社を蹴って、昼飯も食わずに新聞社に行って受けるか。

これを学生に言うと、面白いですね、今の学生。「君だったらどうする？」ちょうど半分半分になりました。それだけボクも迷ったわけです。男性の生徒は、なぜか残る。ボクも残ったんですけどね。残って無事就職したんですけども。でもその引っ掛かりがずっとありましたね。「ボクは文字を書きたいんだ。何かやりたいんだ」っていうのが引っ掛かったために、ボクの人生で1人のミューズに会うんです。それが直木賞作家の永井路子さんでした。永井路子さんはまだご存命で、『花燃ゆ』とかいろんな歴史小説を書かれた方ですね。永井さんの講演がある、ちょうどこういう感じで。その10分の休憩の間に、「おまえ、会ってみるか」って将来女房になるお父さんから言われたんです。

ボクはその時會いたくてしょうがなかったんです。何を言っているかというのは、あんまり分からずに取りあえず小説家ということで、会いに行きました。その時に、ボクの書きためた原稿用紙を持っていくというのは、10分間ですよ、ですから失礼になるだろうと、そう思ってボクは1枚の漫画を描いたんです。4コマの猫の漫画です。擬人化したやつ。それを一夜漬けで描いて、永井さんに会った時に、「ボクはこういうもの描いております」と出した。そうすると永井路子さんは「あなた、漫画家になりたいのね」と。思わずその言葉で漫画の道の扉を開いたんです。だから不思議な人生の巡り合わせですよ。

その時に永井さんがおっしゃったことは、1つは「ボーナスというタイトルで10アイデアが浮かびますか」と言われたんです。「浮かびません」。「駄目ね。もしあなたが将来漫画の道で成功して、二足のわらじに疲れた時、その潮目というか、基準は会社の収入の6倍の原稿料を持ったら、辞めなさい。それまではあくまでも趣味でいなさい」。折りあらば、ずっと永井さんの所に行って「もう疲れました。どうしましょう」と言ったら、「6倍になった?」「いやまだ」「じゃ続けなさい」ということをずっとやりとりしてたんですね。ボクがその間に、二足のわらじを辞める2年前に先ほどの『ハートカクテル』を描き上げました。

ボクの名前は「わたせせいぞう」になっています。ちょっと前に戻りますけども、ちょうど長野に転勤したんです。その時には、永井さんのお世話というか、永井さんのおかげというか、でも永井さんという顔で連載が取れるわけじゃないですよ、紹介してもらったんですけども。「コンテストを受けなさい」っていうことで、ボクはコンテスト受けました、漫画で。で、賞を取りました。さあ、今から二足のわらじだという時に、会社の辞令が出て、長野に転勤。今でこそ宅配で、流通で、あるいはデータで送れます、作品を。当時はやはり持って行かなきゃいけない。ですから東京に住んでないと、漫画家とかイラストレーターって活躍できなかったんです。ボクは長野に転勤になった時、これでしばらく漫画は諦めなければいけないって。

就職して3年目ボクはずっと営業やってたんですけどね、営業の顧客のお母さんたちとママさんバレーをしてる時に1本電話があって。元の編集者から「わたせさん、しばらく長野行ったまんまですけども、もう1回漫画を描いてみませんか」という1本の電話が入った。で、描き始めたんで

す。3年間は会社の仕事オンリーでやってたために、創作のほうの扉を開けるとこれぐらいの光で、今からいろんなものが立つという状態で、たくさん描きました。

8月に電話が来て、10月ぐらいになんとか東京に出て原稿を渡したんですけども。突然、「わたせさん、じゃあ来年から連載を始めてください。あなたはサラリーマンだから、毎週ですけど2ページだったら大丈夫ですか」。嬉しくて、OKですよ。何でもいいですよ、もう。1ページでも1コマでもいいですから。そして2ページの連載をもらいました。

その時に「わたせさん、ペンネームを考えてください」。いろいろ考えたんです。その中に、あさかぜ何とかっていうのを考えた。「なぜ、あさかぜ？」と言うと、ボクの母親と父親はおじいさんが亡くなった後、大阪町ってご存じですか、小倉駅の近くですよ。大阪町の祖父の病院跡に、渡瀬グリル、渡瀬ホテル、旅館渡瀬、ハクオウ渡瀬というのをバーンと建てた。おふくろが1人仕切って。父親が二足のわらじで。当時、グリルは、とても味が良かったんでしょうね。日野原重明さんとか松本清張さんが見えて。ちょうど駐留軍の基地があったんです。グリルは駐留軍の将校たちがいて、そしてそのホテルの脇の倉庫には、まさにコカコーラとかキャンベルのスープだとか、ピンク色のアイスクリームだとか、アメリカがあったんです。将校たちが時々ボクにくれたのが、アメリカのコミック。オールカラーのコミックでした。その頃からなんかそういう漫画の、色付きの漫画に憧れたんですかね。ボクいつも思うんですけども、商売というものは10年続けば軌道に乗ると思うんです。ところが9年目で店はつぶれました。

ボクがちょうど高校3年の時です。小倉駅から上京したんです。母親はあさかぜに乗って「もうあなたはここに帰ってきて、あなたの家はないのよ。私は今からお父さんの仕事先の愛媛のほうに行って、私たちはそちらで暮らします。だからあなたが育ったうちは全部もうない」と言われた瞬間ものすごくズシンときまして。小倉は1歳から18歳までで、その後ずっと東京にいたというのは、そういう訳です。

そしてペンネームとしてあさかぜ何とかというのがあったんです。これいいなと思ったんですよ。そういうボクの背景を背負ってるから、このペンネームにしたいと思った。ところがその編集部から全然連絡がないんですよ。「あれ？2ページの連載どうなったのかな。この前ペンネーム、考えろって言ったからたくさん考えて。どうしたんだろう？」で、電話したんですよ、恐る恐る。「あの話、本当ですか」と。「いや、本当ですよ」って。「ボクのペンネームは？」、「いや、もうあなたのペンネーム、ひらがなの わたせせいぞう にしました」(笑)。謂われはそんなもんなんですね。渡瀬政造って漢字で書くとね、本当に損害保険会社の営業社員の名前なんですけど、ひらがなで書くと本当になんか柔らかい感じがします。



そこで連載が始まって、それを見た講談社の『モーニング』の編集長から連絡があって、4ページのカラー、ちょうど週刊でやりますから連載を始めませんかという連絡があったんです。損害保険会社っていうのは、アルバイトを認めないんです。そういうことがばれたらアウトですね。今でこそ企業内営業とか、みんなやってますけども。今でもちょっと損保は無理なんじゃないですかね。その代わり、ボクは日頃から会社のポスターだとか会社の機関誌、それに4コマの漫画を描いたりイラストを描いたりしてバーターしてたんですね。業務

の部長に「この『ハートカクテル』っていうのが始まりますけども、会社のイラストも漫画も一生懸命描きますからお願いします。」っていうバーターで連載が始まった。

ちょうどボクがある支社の支社長になった頃ですね。営業所ですから毎月毎月、数字ですね。数字が出ないと駄目なんです。よく常務なんかから「わたせ、あの営業数字を落としたら漫画描くな」って脅しを、パワハラを受けて、その中で描いてたんですけども。なぜかボクの部下たちみんな、ボクを応援してくれまして。やはり漫画を見てたんですね。営業所なんで2人いるでしょ。そうすると「支社長、先週のあれ良かったですね」とか小声で言うんですよ。そういう若者たちにもものすごく助けられて、おかげさまで成績もなんとか順当にきたんですけども。

2度目の岐路、40歳の時。会社の辞令が出ました。16年間ずっと営業をやってたんですけども、辞令が出て。営業から企画課長に。企画課長っていうのは新しい保険を作るといことなんです。クリエイティブを目指したボクは、最初に入社して行きたかった部署が企画室なんです。企画室にあてがわれた。そこへの辞令をもらって企画課長になった。会社はずっと二足のわらじを、片目を開けて見過ごしてきたんですけども、そろそろ1つにしてくれよっていう、そういうプレッシャーをひしひしと感じまして。営業だと外に行っている人々と会って、自分の裁量で時間つくれますけども、企画課長っていうのは後ろにいろんな偉い方がおりまして、後頭部に視線を浴びるんですね。でも行きたいし。損害保険という会社も好きになりましたしね、長野に行ってから。参りました、「どうしようか」と。その時の仕事の1週間のタイムスケジュールっていうと、月～金を会社の仕事で完全燃焼して土日に制作してたんです。最初の頃はそういうことができなくて、日頃営業しながらずっといろんな営業の活動の数字を脇に置いて漫画のストーリーを考えてた。全然駄目ですね、そういう時のストーリーって。逆に土日にですね、好きな絵を描いてる時に、「今月は幾ら足りないな。どうしよう。どここの銀行へ行って、お願いしようかな」と思っていると、ろくなストーリーは書けない。思い切ってもう月～金は完全燃焼しよう。営業マンですから、お得意さんと夜の夜中まで付き合わないといけない。ボクの大嫌いな演歌を聞かなきゃいけない(笑)、お得意さんの。嫌だなと思いながらも、まあ営業ですからね。いつまでもニコニコしながら「上手いですね」とか言って拍手しておりましたけど。本当は帰って早くと思ってたんですけども、そういうことも駄目ですね。やっぱり発散した。そこで完全燃焼させて、土日は全て五蘊の憂いなく、作品に取り掛かった。そういう生活をやってた。

で、40歳の時に先ほど言いましたように辞令が出た。女房、子ども、まだちっちゃいんですよ、相談しました。「いいわよ」。ちょうど女房の両親もおりましたので、「どうでしょう」って。「もし万が一、うまくいかなかったら、よろしくお願いします」ってね。そういう保険をつけながらお願いして。そしたらみんなOKです。

先ほど言いましたように月～金は仕事、土日は描いてであつたんですけど、両方とも一生懸命やるってことはやっぱり体に負担がきてますね。危ないなと思ったのは、ボクが営業車に乗って。赤信号があるんですね。「あ、ちょっと寝れるな」。そういう状況になったんです。2秒か3秒、眠れるな。これちょっとしんどいな。そういう時に辞令が出て。ボクも若い人たちと一緒に仕事をするっていうことは大好きでした。でも漫画のほうも行きたい。当然会社の上司は反対したし、友人たちも反対しました。友人たちは「なんで損害保険で」。「辞めたらどうするんだ。漫画は1枚描いて幾らでしょ？病気になるらどうするんだ。描けなくなったらどうするんだ。会社にいたら描けるじゃないか。だからもう辞めるな」と。「年をとればとるほど年収も上がっていくから、子どもの教育にいいだろう」と。ほんとに周りの者は反対しました。

友人の中には「有名な易者がいる(笑)。その易者に託せ」。親切な友達です。先ほどの北海道の彼なんですけども。それで上野の方に行きまして。そうすると易者の偉そうな人がいて、偉そうじゃないよね。座ったボクの手を見て「お、あなたの手の組み方がいいじゃないか」と。こうやったんですかね、その組み方がいいと言われた。一喝するんですね。後で思ったら、あれは脅しですね。

パーンと脅かしといて。その人が言ったことは、最終結論は「もし会社を辞めて、よく分からない漫画を描くとなると、2年で一家離散」と言われた。「ひえー、離散か」。次の易者は何て言うかな。同じことを言った。だって同じなんか四柱推命学で通っているから、同じことを言いますよね。でもその時は、辞表を出した後だったんです。

なぜ辞表を出したかと言うと、1つ作品を書くというロマンがありますね。元来ボクはオプティミスト。楽観主義者なんで、そういうことを考えずに楽しく絵が描けるだろうな。月から金曜日までずっと全部描けるんだと思ってた。そっちのほうへ傾いていった。最終的にボクは、自分自身に問い掛けてみたんです。40歳のボクが、45歳のボクを想像してみたんですね。そして50歳のボクも想像してみた。45歳のボクと50歳のボクが、今の40歳を見て、振り返って、「なんであの時絵の道に行かなかったんだ」っていうような、何か分からないですけど、そういう雰囲気を感じ取ったんですかね。じゃあボクはもう憂いなく、だいたい憂いがあるんだけど、絵の道に行こうということで3月31日で辞めました。

4月1日。今までずっと二足のわらじで、一番下の娘とディズニーランドに行けなかった。ちょうど4月1日にディズニーランドに、娘と手をつないで行ったんですけどね。その時、朝感じたことは、「何か自分の上の大きな傘がなくなった」ということです。これは組織の中にいて、本当に大切なことなんです。ありがたいことです。でもその傘がなくなったなら、酸性雨がもろに当たる。何事をしてでも自分一人でしょ。病気もできない。組織の中だと、いろんな年齢の方とコミュニケーションが取れるでしょ。20歳の彼は30歳の人、いろんな年齢層。そして、社会の潤滑油であるいろんなマナーとかを教わってたわけですね。それがなくなったということは痛切に感じました。

娘とディズニーランドの帰りに、娘が「お父さん、また明日も来れる？」「明日も来るよ。今までなかなかできなかったからね。」と言ったら、その約束はもうずっと果たせなくなったんです。バタバタバタッと。まあ、わたせさんっていうのは、サラリーマンで枷が掛かっていた。講談社が防波堤になってたんですね。「防波堤外しますよ。どうぞどうぞ」と。それで食ってかないといけないうすから。外したら、わーっといろんな仕事が増えて。あの『ハートカクテル』を中心に、いろんな作品をやってきました。それから一貫、それからずっと長い列車の旅が続いたんですね。

北九州との縁

ボクは18の時に出て、それからしばらく北九州と音信不通だったんですが、北九州の糸がかすかに結ばれてたんですね。ある時、市の方から「門司に倉庫がある。倉庫の壁画を描いてくれないか」という話が出た。北九州との関わりが、その一言でつながりました。ボクは辛い思いはしたんですけど、やっぱり北九州に育てられてますからね。何か恩返しをしないといけないということで、壁画を描きました。それから2002年に門司港わたせせいぞうギャラリーが、うちの事務所と市との共同経営で建って、旧大阪商船ビルの1階にございます。ぜひ行ってみてください。

あと2004年のプロジェクト。その時にイメージしたこの絵が4枚ほどございます。まずこれが春の絵です。門司駅の反対側の山で、こっちが海ですから、山側を描いて。お花がある世界にしたかったんですね、街を。それで夏。これは海側ですけどね。とにかくこの街をお花の街にしたいというのが、ボクのイメージだったんです。いろんな建物だと、箱物はコストがかかりますけれども。花とか桜とか、これはそんなに金はいらない。東京の四大桜の名所、飛鳥山、御殿山、上野、それから隅田川沿い。全部、徳川吉宗が造ったんですね。ああいうふうに門司の街を、そして北九州。住んでやっぱり花があるっていいことだと。本当は塔を建ててほしかったんです。ところが却下されてね、塔が建たなくなった。幻の塔の横にあるのがれんがですね。これが夏で、これが秋で。このような絵がございます。これが冬の絵で、海岸にずっとこういうパームツリーか何かをやって

ほしいということをお願いして。これがプロジェクト。時々行って様子を見てるんですけども、だいたいあの場所にもいろんなマンションが建っておりますね。あるマンションはボクが色を付けたんですね。時々、心配になって、あの色は大丈夫かなとか。

次に北九州のほうから連絡があったのは、北九州空港。これができた時に、絵を描いてくれませんか。たくさん描いたんですよ。その中の1枚の絵でございます。

これは今、改装してますよね。来年にオープンする門司港駅をバックに描いておりました。やっぱりこの建物はとても魅力的なんですね。門司港の駅を知らない方でも、この駅に憧れて、これをいいなと言ってくれたり、買ってくれたりしております。

こういうふうにとくさんの、北九州に恩返しをすることができた。毎年、ボクは、車いすバスケットボール国際チャンピオンズカップというのがありまして、その時にも来ております。来月ありますかね。毎年来ております。あと、門司港のギャラリーも時々来ております。来年、すぐ近くにボクの、大阪商船のビルがあつて、そこで新門司港駅ができた時には、ボクのギャラリーで作品展をやりたいなと思っております。これは来年の話ですね。

これまでずっとボクの生い立ちと北九州の関わりをお話ししました。ここからは皆さんが学生になったというつもりで聞いてください。今から1枚の絵を飾ります。この絵にボクが大学の学生たちに教えたことです。この1枚の絵には2つの意味がある。1つは、これは一曲六双の屏風なんです。円山応挙っていう人が江戸時代に、ちょうど半ばですね、その方が描いた「竹と雀の図」屏風というんです。『竹雀図』屏風というんです。この絵は全ての日本画、それから全ての日本の文化の象徴の1枚だと思ふんです。抜けがあるんですよ。6枚目は何も書いてないですね。この空間は、ボクは日本の文化の象徴じゃないかと思ふんです。あの空間、何だろう。多分、印象派のマネの『草上の昼食』という絵をご覧になったと思ふんですけども、彼が描かせたら、ここにいろんな人を描くと思ふんですよ。草の上でピクニックの裸の女性が2人です。奥に池があつて、そこで女性がまた水浴びをしている。いろんなものを描いている。ところが一切描かない。全部空間にしてるんですよ。余白。ボクは高校時代の、墨の部分と白の空間を思い出しましてね。この空間こそ、日本の文化の原点だと学生には教えております。

ある時BSを見てると、トルコの作家、オルハン・パムクという人がおりまして。オルハン・パムクさんが鎌倉の有名なお寺なんですけども、そこに来て、住職に問答するんです。トルコから来て、禅のことを少し勉強して、和尚さまに言いたいことがあったんです。何を言ったかと言うと、そのオルハン・パムクさんは「無は何だ」ということを尋ねるんです。ボクはこの住職は何と答えるんだろうと、興味津々で見てたんです。なんとなくちょっと「大丈夫かな、この人」っていう思いがあつて見てたんですけども。その住職は「なかなか難しい問題ですな」と言ったんです。それを聞いてびっくりしました。何か言えればいいんですよ。無とは何とか。それを人ごのように、難しい問題ですって、うそだろうと思って。テレビ見て、ひっくり返ったんですけども。

そのオルハン・パムクさんが鎌倉の僧侶に言った同じ質問を、ダライ・ラマに言った。ダライ・ラマに「無とは何ですか。」と。ラマは「存在してないもの。それを無と言うんだ」と。どういうことかと言うと、「もともとないものの所には無がない。あつたところに何も無い、それが無だ」と。ですから、もともと何もないのは、あるんですよ。今ない状態が無だと。あるのはあつただけなんです。今は無い。それが無だ。日本の文化っていうのはこれなんですよ。

ボクの好きな、いつもノーベル賞にノミネートされてるんですけど、村上春樹さんが『騎士団長殺し』上下巻。ボクは上巻だけ読んだんですけども。その中に『彼の素晴らしいところはその空間にある』と。彼というのは日本画家です。『描かれてない部分にあつた。彼はそこをあえて描かないことによって、自分が描きたいものをはっきりと際立たせることができた。恐らく日本画というフォーマットが最も得意とすることだろう』と村上春樹さんが言ってるんです。春樹さんはあれを見

て言ったとは思わないですけども、それが日本の文化の1つだと。

もう一つ、これを学生たちに言ってるんですけども、「あなた方の幼い頃の脳の中」という。ボクもそうですけども、学生たちはいろんな情報を集めるんです。頭の中に情報だらけです。ある脳学者は、人間の脳っていうのは20世紀末に脳が収容できる情報量は飽和に達した。でも飽和に達したって、ずっとボクたちは毎日スマホで情報を拾い続けてます。ですから成人の脳は、先ほどのマネの絵じゃないですけど、いろんなものが詰まったっていうんです。余計がないんです。そうすると創造する力、創造する時間がないんです。毎日スマホを見て、ちょっとはスマホはやめて考えてごらんって言いたくなるほど、みんなものすごい情報をどんどんどんどん入れてます。

そこでそのことを話して、なぜ柔らかいイメージを持たなきゃいけないかと言うと、やはり小さい頃、よく子どもが、皆さんのお子さんがとつてもしょうもないことを言ったり、作ったりすることありますよね。ボクの子どもは、遠足で帰ってきて膝がしびれた。その時に彼は「お父さん、ボクの膝がサイダーになっちゃった」。「おお、この子は詩人になるな」なんて思ったんですけどね。ボクもそうだと思うんですけど、小さい頃は皆さんも、自分が小さい時はきっと何か言って親を驚かせたんですね。

なぜかと言うと、抜けがあるんですよ。想像する部分があるんです。詰まってないからです。この詰まってない部分を、ボクは学生たちにつくってあげるということで、上半期15回神奈川大学で講義をしました。ボクは外国語学部、国際文化交流科というところにおりまして、シラバスのタイトルは「クリエイティブ力を付けよう」。クリエイティブ力をどうやって付けるかっていうのを15回で。学生たちは、「今、何か思い付いたお話を書いてごらん」って言うてもできないんですよ。ボクだってできません。でもその時、音楽によってその想像をかき立てるということを、ボクは前のカルチャースクールでやってたんで、学生たちにそれをやらせたんです。約束事はインストルメンタルの音楽を流します。必ず授業の最初です。先ほども黙とうがありましたけども、そのように始まった時に部屋を暗くして、みんなちょっとメディテーション。そうすると音楽を流すからね。思い付いたことを、この音楽で思い付いた何か風景があったら書いてごらん。約束事はTP0。想像した映像がいつなのか、春なのか夏なのか、朝なのか夜なのか。ロケーション、どういう状況なのか。1人なのか何なのか。どこなのか、森の中なのか、学校の中なのか、どこなのか。TP0だけは入れているということで、音楽を流します。

そうすると最初はやっぱり戸惑いもあるって「浜辺をボクは1人歩いている」。この3行しか言わないです。突然ですからね。それをやらないといけない。それを何回か何回か繰り返しますと、初夏が梅雨の晴れ間になったり、いろんな話が出てくる。それでちょっと最初のサビをつかんで、初夏だったらどんな初夏かっていうことをもっと想像して手繰ってもらう。すると、梅雨の晴れ間が出てきたり、真夏の夜の初夏だったり、いろいろ出てくるんです。自分が何歳なんだっていうのも、想像で書くようになるんですよ。犬を連れてたりする。あるいは彼女を連れてたりする。彼女はどんな服を着てる。

15回音楽を聴いてレクチャーするんですけども、回を追うごとに、みんないろんな1行ずつがどんどん増えていきます。いろんな修飾が付きます。で、1つのお話になるんです。100人いた時はそれは無理だったんですけども、50人のクラスで始めました。15回になると、みんないろんな話を作り出す。まずみんなのを発表してもらいますよ。そうすると同じ1つの曲でも、私は夏だったり、これは冬かとかね。夜だったのに朝なのかと。この曲がいろんなのにイメージできる曲ほど、ボクは素晴らしいイメージする力がある力がある曲だと思うんです。最後はもう皆さんがみんなの発表を聞いているから、そういう感じ方があるのかとって、またその1行が長くなってお話になってくる。

今日は学校ということもありまして、今から1曲流します。ちょっと暗くできるんですか。今から曲を流します。ちょっと目を閉じて、TP0、いつなのか、秋、冬、それから午前なのか午後なのか。

どういう状況なのかをちょっと想像してみてください。イメージすることですね。ちょっと曲をお願いします。

音楽

さあ、今の曲で思い付いただけでもいいですけども。春と感じた方？ いませんか？ ああ、1 人でですね。じゃあ、夏。多いですね。秋。秋、多いですね。じゃあ、冬。春と冬が少しですけども、まばらにありましたけども、全部ありました。

これはボクが非常に面白いとしたのは、松岡直也さんの遺作となった曲です。この曲を一番最後にやりました、15 回目に。学生たちがずっと練習、レッスンを重ねて、15 回目に。じゃあ発表してもらおうといった、そして聞いた、その時に、こんなことを発想するのかなというストーリーを書いた学生がおります。女子学生です。ちょっと彼女の発表した文字を石丸さんに読んでいただきます。お願いします。そして音楽のほうも、もう一回。音楽で盛り上げて、お話ししてください。

石丸：「ボクたちは風の兄弟。今日は弟が初めて家から外に出る日。弟は外に出られるのがうれしくて飛び出していった。弟に森を見せた。海を見せた。街を見せた。弟はあまり街で動き回れなかった。ものが多くて怖かったんだ。だからボクは教えてあげた。

ボクたちは何にでもなれる、触れるんだよ。ほら、この洗濯物だって。洗濯物が揺れた。ほら、このリンゴだって。リンゴがカラカラ落ちた。弟は楽しそうにいろんなものに触った。その後、街の奥のお屋敷に 2 人で止まった。大きな窓から中に入って、いろんな部屋を見た。宝石を触ったり、廊下の火を消したりして遊んだ。

一番奥の部屋に 10 歳位の青い目をした長い金髪の少女がいた。その子を見た時、弟はその子から目が離せなくなった。弟がその子の髪に触ると、少女の金色の髪が優しくなびいた。その時、弟は初めて苦しいという気持ちを知った。どんなに少女に触れても、手を握ることさえできないから。ボクと弟は少女の部屋の窓からまた広い街へと戻った」。

この曲からこういう話を、15 回目で書いたんです。多分最初は、先ほど言いましたように、「初夏、私は海岸を歩いている」、この 3 行だったんですけど。音楽を聴いて、もっとイメージしてごらん、もっとイメージしてごらんと言うと、こういうお話ができたんですね。そうすることによって、想像する力ができます。イメージする力ができます。ストーリー力も出てきます。

こういう脳を持つことは、どうして、今から、大切なのかと言いますと。必ず上の会社に行ったら、上司から「君のアイデア、何かある？」って聞かれると思います。その時、情報でテンパってたら、全然新しい発想は出てこないです。だけでもそういう会議の後とか、明日面接の時は、必ず「自分のインスツルメンタルを持ってて、脳を柔らかくして行くんだよ」ということを言っております。そうすると柔らかい脳で、何か思い付くんですね。その柔らかい脳こそ、アイデアが出る基地なんです。これってやっぱり不思議なんですよ。そういう想像する時間って、今、ないんですね。だからもっともっと増やそうということで、大学で 7 年間教えてきました。

ちょうど外国語学部ということで、航空関係に行きたいとか、それから旅行業者に行きたいとか、CA になりたいという人もいました。こちらの大学ではやはり外国語関係でそういう外国語で、そういうところに行ったり、あるいは福祉とか介護とか、そういう学部があると聞いてます。

そういうこともぜひ曲を聴いて、イメージして、脳を柔らかくして、相手と向かって、その前に相手をよく観察して、そして 1 つの自分の考えを言えばいいんじゃないかと思います。ここは学校なので。ちょっとアイデアの基地、クリエイティブ力を付けようという 1 コマを、皆さんに実体験してもらったわけです。

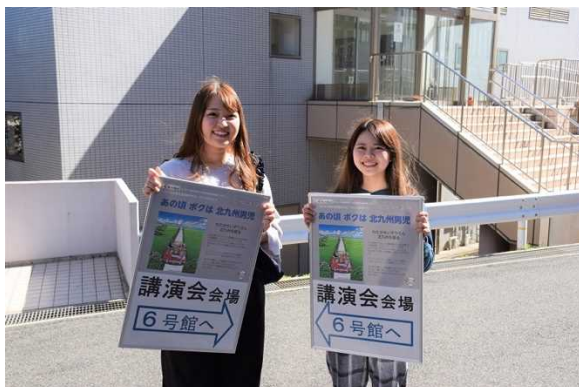
おわりに

あっちいったりこっちいったり。玄界灘をこの船はどこへ行くのかと思っておりましたが、無事、着くことができました。皆さんにきちんとお話を聞いていただいたということで今から1つDVDを流します。20分弱ですけども。ちょっとお約束がありまして。今から流すDVDの映像は『HEART COCKTAIL eleven』。キーワードは11です。いろんなところで11が出てきます。キーパーソンは天使です。彼はいつも黒い帽子と太った体で、黒い服で、真っ黒のヨークシャーテリアを連れて、必ずそのページに現れます。まず天使の図書館からあります。エンジェルの図書館で、1つ大切にしている本、古書があります。それはやがて彼に出会うであろう彼女のお父さんが持ってたもの。それを最後彼が受け取るんです。そしてこの話は、ちょうどパリに憧れておりまして。パリの街を描いてるかのようですね。11の街灯があって、いつも11番目の街灯が消えてた。最後に2人が出会うんですけど。それまでずっと人生の中でどっかで擦れ違ってるんです。いずれ巡り会う人はどっかで、ボクは会ってるんじゃないかと思うんですよ。ある時、彼女はお母さんのお腹の中にいて、病院に行った時。そのいたずら坊主の彼は、骨折で同じ病院に。そして松葉づえが外れて、出てきた時に。彼女は赤ちゃんになってお母さんに抱えられてきて。前の彼女と一緒に海に行ってた時に、今から出会うだろう彼女が家族と一緒に同じ海に来て、同じ夕日を見てたと。こういうとてもロマンチックな話で、最後には2人が出会うというまでのお話。これは作曲家の三枝成彰さんに曲を作ってもらいまして。有名なマエストロの友友直人さんが指揮をとって、わざわざこの20分だけの映像のために、音楽を付けていただきました。全て友情で作った、1つの作品です。最後にこれをちょっとお見せしたいと思います。



DVD上映 終了

わたせせいぞうさん講演会 学生スタッフ



看護学科2年生 江田有沙
甲斐杏奈

地域連携室長

はじめに

関西大学の江川直樹先生の受賞記念講演会が7月14日(土)に関西大学梅田キャンパスで開催されました。本学からの参加者は、石丸、林田、樋口、神山、谷川の5名でした。本学が地域連携室を窓口として地域とのつながりを作っていくにあたり、どのような拠点を、どのようにつくっていくかを考えるためのヒントが多く含まれていたように思われます。

第1部 「大学連携地域再編プロジェクトの数々」

教え子の皆さんが地域の人たちの共に進めてきている3つのプロジェクトの報告でした。それぞれ学生主体でかわり続けており、その過程や協働のカタチは多様であることが、改めて示されました。

今回報告された出町慎氏、辻村修太郎氏、関谷大志朗氏は一般社団法人カンデ¹に所属するものとして紹介されましたが、この法人は昨年12月に設立されたものです。一般社団法人カンデの設立は、学生主体でつくられてきた取組を維持し、発展させる一つの方向と推察されます。

#1 「関わり続けるという定住のカタチが始まるとき」

兵庫県丹波市をフィールドとして関西大学と丹波市の連携による農山村の地域再生の取組の報告

#2 「365日住民が気軽に集まれる場所『だんだんテラス』」

京都府八幡市のUR男山団地中央センターに作られたコミュニティ拠点づくりのとりくみ。だんだん人が集まってくるようになり、小さな取組が同時多発的に展開されていく過程の報告

#3 「『南花台スマートエイジング・シティ』団地再生モデル事業」

大阪府河内長野市の南花台地区におけるみんなが健康で自立して生活できるまちづくりを進めて行く過程。ワークショップ、「南花台の未来を考える住民集会」、コミュニティ拠点の「コノミヤテラス」開設、看護学校誘致など、さまざまな取組が進んできている

¹ 一般社団法人カンデは、協働と実践を以って、良好な集住環境をデザインすることを目的として、①協働型まちづくり事業、②空間ストックのリノベーションに関する事業、③建築および建築を取り巻く環境の設計、監理、施工及び施工監理にかかる事業、④まちづくり、団地再生、地域再生等に関する調査、研究事業、⑤まちづくり、団地再生、地域再生、都市・地域計画等に関するコンサルティング事業、⑥まちづくり、団地再生、地域再生等のコーディネートに関する事業、⑦良好な集住環境のデザインに資する人材育成事業、⑧イベント・ワークショップ等の企画、運営に関する事業、⑨地域情報の編集・発信に関する事業、⑩地域資源を活用した商品・技術の開発・販売に関する事業、⑪飲食業に関する事業、⑫その他等法人の目的を達成するための事業を展開するものとされている。(一般社団法人定款)

第2部 『場所の声を聞く』集まって住むカタチのデザイン」

江川直樹先生がご自身の歩みを現代計画研究所の時代に遡り、現在に至るまでの、集合住宅リノベーションや地域の再生などについてお話されました。

現代設計研究所で学ばれた「間の空間の設計」、「協空間」、「場所の声を聞く」、「小さく解く」、「混ぜて解く」、「場所との共生」、「ひとけの表出」などの観点が、一つ一つの場所で、そこで暮らす人々の思いを代弁するようなカタチで実現していること、その後の人々の暮らしを豊かなものに行っていることが伝わってきました。

個人的に現代設計研究所のコンセプトは、小児医療におけるトータルケアにおいて病院を「こども（患者）が暮らす空間」に変えていく営み、さらにシステムズアプローチや解決焦点アプローチ（SFA）などの心理療法で追究してきた観点と親和性が高く、共感できるもの満載でした。

考察

今回の講演会はさまざまなインスピレーションを与えてくださいました。地域連携室がめざす「大学として、学生や地域の方々と共に、地域の問題解決にあたる」スキーム構築において参考になることが多くありました。たとえば「つくりすぎない」、「小さく解く」はSFAに通ずるものです。この「つくりすぎない」と「共にある人々の期待に応える」とことは、ときに大きなギャップを生じます。「つくり込む」ことは人々の期待に添うことでもあります、人々の自発性を削ぐ可能性もあるからです。

そこでどうするかについては、つぎの少なくとも2つの道程が考えられます。

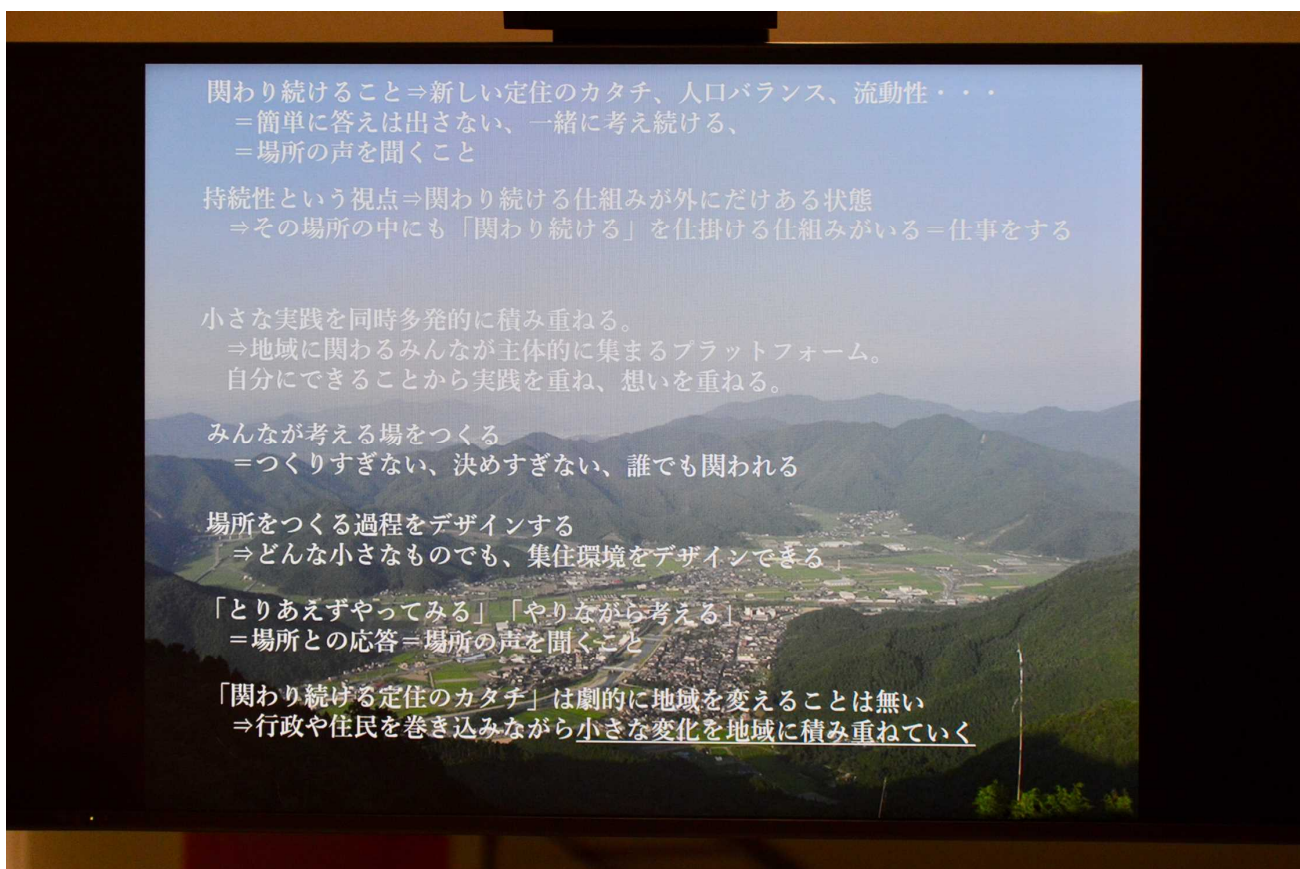
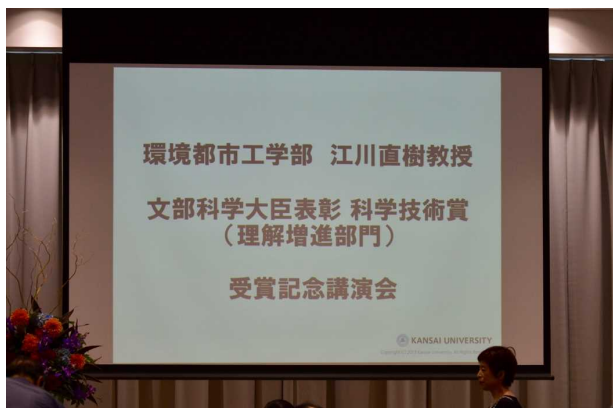
- A 大きな枠のみをつくり、内容をつくっていく人々の力を引き出すカタチで展開する。後に、その内容が枠を凌駕してきたところで、枠自体が変えられていくことをめざす。（江川先生方式）
- B 合意を得るために必要な程度につくり込み、展開していく過程で、それを否定することを含む人々の力を引き出す。それらの力に依拠して、当初のものをより良いものにつくりかえていく。

江川先生のお話に従えば前者が望ましいのでしょう。しかし、どうしても2から始めざるを得ない時があります。地域連携室の出発時、部局を越えた合意を得るためにある程度作り込んでおく必要がありました。その意味で地域連携室はBの流れで進んできています。ただ、出発時には見えていなかった多くの課題に直面し、取り組んで来た経過から、出発時の枠組は作り込みきれていなかったとも評価できます。地域連携室の皆様、学生さんたち、地域のみなさまの力を得て内容が形成され、枠組が変化しつつあります。

いま、ここで、なにを大切にするか？を問うとき、次のように言えそうです。

「場所の声を聞く」ことで解答を得る姿勢を貫くことだ。地域連携室の皆様、学生たち、地域のみなさまの声を聞くことを大切にしたい。とくに、学生スタッフの役割に期待すること大である。

たいへんな仕事ですが、前を向いて進んでいきたいものです。



(2018 年 7 月 14 日)

『関わり続ける定住のカタチ』 関西大学佐治スタジオ視察報告

地域連携室長

2018年7月14日、2007年に開設された関西大学佐治スタジオ（兵庫県丹波市青垣町佐治）の10年を超える取り組みについて関西大学梅田キャンパスで講演を聴き、翌日15日に丹波市青垣町に向かいました。

「関わり続ける定住」というカタチを取り、丹波市の事業とコラボしつつ、「空き家リノベーション」、「ワークキャンプ」などを進め、地元のみなさんの信頼を得て、地域のみなさんが主体となるさまざまな取り組みを進めてきています。G P（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）のような補助金交付期間を終えてからも、関西大学と丹波市が予算を確保するなど、面白い工夫をしておられました。

今回佐治スタジオなど3箇所のリノベーションされた拠点を中心に、町の中を歩きました。間口は狭く奥行きが長い、間口税を意識した典型的な作りで、障子をなくすととても開放的な空間になります。外気温は38度くらいだったのですが、内部は風が通り、涼しかったです。一部、廊下を土間にして行き来しやすくしたり、冬は暖かさが逃げないように階段の上部に引き戸をつけるなど、工夫されていました。必要に応じて構造補強なども施していましたが、もとのカタチはできるだけ活かすという考えでリノベーションされていました。

おじゃました時は、1つの拠点でワークショップを行っていました。空き家活用サークル佐治倶楽部の会員になると、いろいろ使えるそうで、門戸は開放されているそうです。

視察した私たちも、会員になって交流してみたいと思える環境でした。

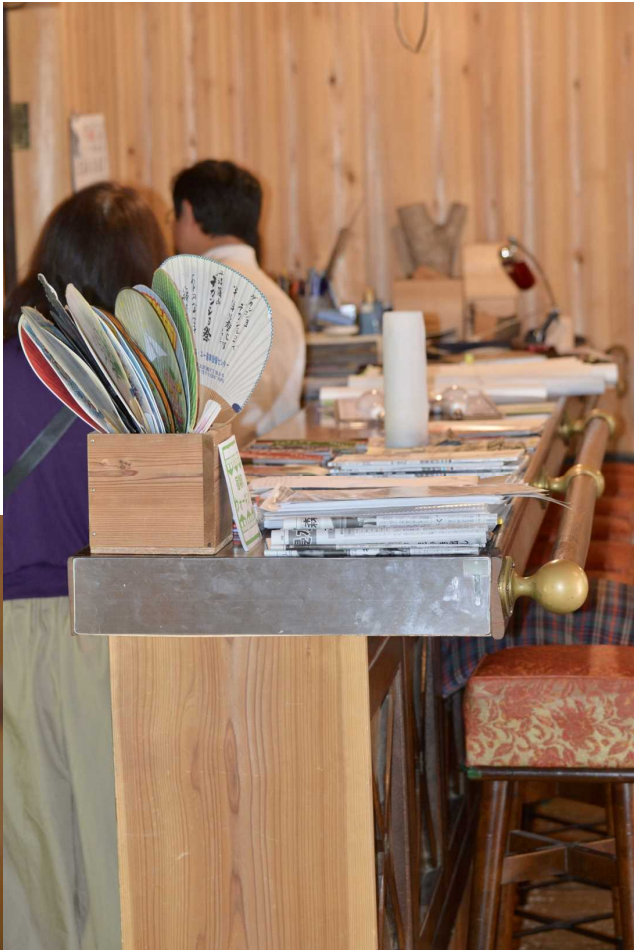
ところで、町歩きで出会ったおばちゃんからは、昔はとても賑やかだったこと、小学校が統合されスクールバスが運用されるようになって、こどもの声が少なくなり寂しいなど、お話を聞くこともできました。

お昼を食べた「森カフェ」では、営業しているおばちゃんたちが、見かけぬ私たちに興味津々で、いろいろ話しかけてくださいました。北九州からの来訪であること、38度を超えている町中を歩きまわっていたこと、お米が美味しい美味しいと言って、もりもり食べる私たちに、とても感心されたようです。「森カフェ」は、老後の楽しみのために息子さんが改造して作ってくれたと話してくださいました。とても楽しい時間でした。

丹波市のみなさんはとてもフレンドリーで、とくに女性が元気でした。そんな住民の皆さんの中で、学生さんたちが活躍している様子がよく分かりました。関谷先生は佐治が宿場町であったことが外部の人々を受け入れる素地を育んだのではないかと指摘されました。「現場の声を聞く」ということの大切さを実感した訪問でした。

以上、今後の私たちの取組の参考になることが一杯あった視察旅行でした。







2018 年 7 月 15 日

2018年度地域連携室の取り組み

1. 平成30年度後期北九州市民カレッジを開講

本学では、初めての取り組みとして、地域の皆様の多様な学習ニーズに対応した生涯学習機会を提供し、自己実現の促進を図ることを目的に「平成30年度後期北九州市民カレッジ」(11月19日～12月10日の5日間の計5回)を開講した。

全体テーマは、『人と人とのつながり』とした。

講座のテーマと担当者は以下のとおり。

第1回： 「現代社会と人間関係」 担当：保健福祉学部福祉学科 今村 浩司教授

第2回： 「人と人をつなぐ真心コミュニケーション」

担当：保健福祉学部福祉学科 古川 敬康教授

第3回： 「ストレスマネジメント」

担当：保健福祉学部福祉学科 高口 恵美講師

第4回： 「子どもに寄り添うコミュニケーション」

担当：短期大学部保育科 笠 修彰講師

第5回： 「メンタルヘルスとコミュニケーション」

担当：保健福祉学部教授福祉学科 今村 浩司教授

受講者は少人数だったが、ゼミのような形で和気あいあいとした雰囲気の講座であった。2019年度も実施する予定。



2. 女性活躍ワーキンググループの取り組み

地域連携室担当室員を中心に女性活躍ワーキンググループが活動している。クリスマス礼拝が活躍する先輩たちと交流する場となることを目指して3つの取り組みを行った。

(1) 学生による平和についてのスピーチ

英語学科3年生の宮武桃香さんが英語で、観光文化学科4年生の清原ちひろさんが中国語で、それぞれスピーチを行った。

(2) 西南女学院卒業生のパネル展示

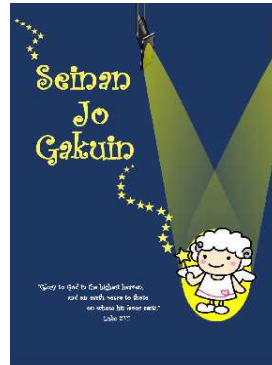
国内外で活躍している卒業生に学生時代の思い出や現役学生へのメッセージといった4項目の回答をいただき、パネルに仕上げ、会場であるアルモニーサンク北九州ソレイユホールのロビーに展示した。



(3) 物品販売とクリスマス献金

英語学科 Golden Z 及び栄養学科山田志麻講師のゼミはクッキーを、保育科東彩子講師のゼミはクリスマスリースなどの小物を販売した。バザー収益（合計 24,240 円）は、福祉施設や N G O ・ N P O 等の団体に寄付された。

購入者には、要（かなめ）ちゃんの冬バージョンのクリアファイルをプレゼントした。



3. フードドライブキャンペーンの実施

「フードドライブ」とは、食べ物を集めるという意味で、NPO 法人フードバンク北九州ライフアゲインの主催により、本学を含む北九州市内の 10 か所において、一斉キャンペーンとして実施している。

この取り組みは、「購入したけれども使っていない、まだ食べられる食料品」あるいは「家で眠っている食料品」を寄付して頂き、食品が必要な方へ届けるといふ、フードバンク北九州ライフアゲインが行う活動のひとつ。

本学は、2017 年度から実施しており、今回で 6 回目である。

第 1 回 2018 年 5 月 14 日（月）～ 5 月 25 日（金）

第 2 回 2018 年 8 月 28 日（火）～ 9 月 7 日（金）

第 3 回 2019 年 1 月 15 日（火）～ 1 月 25 日（金）



4. カレーフォーチルドレンの取り組み

NPO 法人フードバンク北九州ライフアゲインの呼びかけで子ども食堂を支援する「カレーフォーチルドレン」という取り組みを、2018 年度から本学に導入した。本学生協の食堂メニュー「焼きカレー」1 食につき 20 円が子ども食堂に寄付される。

第 1 日目 2019 年 1 月 28 日（月）

第 2 日目 2019 年 1 月 29 日（火）

両日ともに用意した 40 食があっという間に売り切れ、大好評であった。



新聞記事に見る

地域連携室 2018年度の歩み ～地域連携室の足跡～

『西南女学院大学生がカフェ』 ～直方活性化の一助に～

2018年5月6日（日）毎日新聞 朝刊

『地域貢献活動を報告 西南女学院大』

2018年5月8日（火）西日本新聞 朝刊

『講演や予防食で学ぶ』 ～西南女学院と九歯大連携 食と健康講座～

2018年7月1日（日）西日本新聞 朝刊

『脳卒中 連携講座で学ぶ』 ～西南女学院大と九州歯科大～

2018年7月1日（日）読売新聞 朝刊

『わたせせいぞうさん講演』 ～21日・小倉北 西南女学院大～

2018年10月16日（火）毎日新聞 朝刊

『西南女学院短大の親子向け遊びイベント』 ～手作りのぬくもり 気配りも～

2019年1月11日（金）毎日新聞 朝刊

2018年度 地域活動論叢

2018年（平成31年）3月9日発行

編集発行	西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部
	地域連携室
	〒803-0835 北九州市小倉北区井堀1丁目3番5号
	電話 093（583）5243
印刷	モリプリントイング株式会社
	〒806-0049 北九州市八幡西区穴生3丁目11番5号